クールビューティー家政婦さん

笑石

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クールビューティー家政婦さん

【Ｎコード】
Ｎ９１４０Ｆ

【作者名】
笑石

【あらすじ】
俺は至って平凡な高校生である、そんな俺の家は親父と俺の男二人。それでは家事云々に非常に支障をきたすので家政婦さんを雇っていた、だがある日その家政婦さんが三ヶ月入院する事になり代理としてその娘さんが家政婦として来る事になったのだが…！なんとその娘さんは俺の同級生でありクールビューティーとして名高く更には俺の片思いの相手だったのだ！そんな少年とクールビューティーな家政婦の日常ラブコメディー

序話、クールビューティー家政婦さん（前書き）

ラブコメを書くぜ、とおもい書いてみました。でもコメディーばかりでラブがなくなってしまうかもと自分に不安を感じる今日この頃

序話、クールビューティー家政婦さん

驚くさ

　　　　さすがにそれは

　　　　　　　　驚くさ

なんて一句を考えた俺こと秋田　壮児（あきた　そうじ）って読むんだよベイベ）は内心ものすごく焦っている、上のバカみたいに下らない一句は俺の今の心を表していますという話であるのだがその理由を話すに至って色々と前置きが必要なのでそれから話そう。
現在１６歳の青春もとい性春真っ盛りな高校二年の俺は色々な家庭の事情により、まぁ詳しく言うと俺の小学校低学年くらいの時に親父のかいしょう無しに嫌気が差して母親が家を出ていったと言う笑える事情なのだが。ちなみに母親と俺は別に仲が悪いわけでもないのでたまに会って話をするくらいは普通にある。
　そんな親父は母親が出ていってから仕事を頑張り給料は増えて豊かな生活が出来る様になったりしたのだが母親は今更帰る気は無いとの事。さて話がずれていたが家事に能の無い男二人の生活ではいささか厳しいものがあり俺が少し家事は出来る様になったものの親父の血を継いでか限界がみえてきたのである、その時に親父はとある名案を思い付いたのだ。
　家政婦さんを雇おう。俺が中学に入ろうという時期である。
　家政婦を雇う金銭面の問題は親父の頑張りもあり解決済みである、そうして雇った当時３０後半現在４０前半の優しい笑顔が素敵な既婚女性。
　さて、俺が焦る理由はその家政婦さんが少し関係したりというか大分関係したりする。
その家政婦さんこと良子さんには俺と同い年の娘がいるらしいとの

話は大分か前に聞いてあり、良子さんが足を骨折し三ヶ月も入院する事になったのでその間代わりにうちの娘をいかせてよろしいでしょうか？と言われた時に俺と親父は二つ返事で了承したのだが理由は家事が出来る人だったらいいんじゃない？という適当な理由ではあった。
その娘さんとやらが来たのは良子さんが入院した春のある日、１６歳の春の日だ。
別に青春とかけた駄洒落だったわけではないがそんな事はおいといてその梅雨も近づく春の日、彼女が来た時に俺は焦りを覚えた。別に彼女と俺が同じ高校って事が理由でなくしかもクラスメイトって事が理由なわけでもない、上と同じ条件で彼女以外の人間が来てぃてもこれ程の焦りは覚えないだろう事は自分が一番分かっている。
　さて、その前置き１に続き前置き２を話そう。
　俺は普通の高校生である、普通に友人もいるし。
そんな俺には恋焦がれる相手がいたりする、高校に入り入学式にいく途中に突然鼻血を出した俺に優しくハンカチを差し出してくれたあの人。外見もさることながらその優しさに俺のハートは撃ち抜かれてしまうのだ。それ以来から俺は片思いをしているわけだが周りからは純情、一途、ヘタレ等々の称号を与えられたりしている。
　そんな俺が恋する彼女の外見は学年いや学校でもトップクラスらしく狙っている輩は多かったのだが、お堅い性格とか無口とか笑わないとか等々の理由により今となっては狙ってる人は少ないとか。でも俺からしたら優しいしかわいいし胸は少しちっちゃいけど色素が少し薄くて長い髪とか綺麗な目とか言い出したらキリが無いのだが魅力たっぷりだと思う。とこの前友人に言えば『すげぇな恋って』とか意味不明な事を言っていた。
　さて、この長ったらしい前置きで読者諸兄は展開が読めているかもしれないが良子さんの娘であり代理の家政婦さんであり俺の恋する女の子である

クールビューティーな彼女、春野（はるの）　流（ながれ）さんがお土産なのかどうかは知らないがケーキの包みらしき物を持って玄関に立っているのだ。

あぁ、その姿も可愛いなと思ったのは言うまでもないかもしれない。

序話、クールビューティー家政婦さん（後書き）

セリフ一個もないぜハハハ、すいません。感想批評バシバシしてください、待ってまーす。

一話、家政婦さんと今後について話し合う（前書き）

なんかクールビューティーじゃないかもな流ちゃん。とりあえずは誤字脱字等ございましたらお教えいただくと嬉しいです

一話、家政婦さんと今後について話し合う

「こっこんにちは」
「…うん、こんにちは」
インターホンが鳴りドアを開けたら意中の人が居たという状況、少し緊張しているのかおどおどしながら挨拶してきたのでとりあえず挨拶を返した。頭の中は真っ白である。
ただそんな状態でも彼女――流ちゃんの行動すべてが可愛くみえるのは恋のせいだろうか？
「おやー？もしかして良子さんの娘さんかい？」
玄関で流ちゃんを前にして硬直していた俺の後ろから親父が顔を出してそう言った、さっきまで固まる俺を見て困っていた彼女はパッと顔を明るくして
「あ、はい」
と、それだけ答えた。あの子あまり喋る子じゃないのよーと親父は良子さんに聞いていたのでそこは気にしない。
「壮児、何してるんだ？早く娘さんを上げてやりなさい」
ハッと親父に言われて硬直が解除された俺はとりあえず手に持つケーキ屋の包みを受け取り彼女を居間まで案内した。手土産ですと渡された包みの中は外面から予想は出来ていたがケーキだった、後で頂こうと思い冷蔵庫に入れといた。
「あの、私は秋田くんと同じクラスの流と言います」　居間に戻ると親父と流ちゃんが向かい合って何か話をしていた、多分自己紹介？
「あぁ、僕は」
「流ちゃん、この人の呼び方は『親父』でいいから」
「壮児、名前くらい言わせろ」
親子でそんなやり取りをするとクスッ、と笑う流ちゃん。あ、笑ってるとここんな近くで見たの初めて。

「あ、すっすいません。なんかいいなって思って…」
あたふたと彼女は謝ってくるがこちらとしては何故謝られているかは皆目検討つかないのであるが。
「そういえばさ、何で流ちゃんが代理なの？学生なんだしきつくない？」
ふと気になっていた事を聞いてみた、そういえばだが良子さんの名字って流ちゃんと同じ春野だったのか。
「私の家、あんまり裕福じゃないんです。お母さんの入院費もありますし…でも、私父親も単身赴任で常に家居ないのでお母さんが仕事行っている時に家事もやっていました、それに料理とかも教えてもらったりしているので迷惑はかけないつもりですし、頑張るのでっ」
「あわわ、流ちゃんもういいよ、別に文句があるわけじゃないんだっ」
なんか彼女は必死だった、そういえば良子さんもしきりに経済状況厳しいのよねと溢していたし。そんな状況で入院っていうのは結構ダメージがでかいのだろう、保険とか細かい事はよく分からないけど高校生の娘もいるんだしお金がいるのだろうなと思う。てか単身赴任だったんだ、親父さん。それにしてもやっぱり良い子だな、流ちゃん。
「んーまぁじゃあとりあえず、これからヨロシクねー流ちゃん」
「おい糞親父、気安くちゃん付けしてんじゃねぇよ」
「じゃあどう呼べと！？」
「春野さん」
「あのっ！流でいいですのでっ！」
顔を赤くしてそう言う流ちゃんだが何故赤くなっているのかは分からない、多分自分の名前で争ってたからだろうね。
「そ、それじゃ今日から早速仕事させてもらいますのでっ」
「あ、掃除機の場所とか言った方がいいかなー？」
「大丈夫です、お母さんから教えてもらってあります。まず洗濯か

らさせてもらいますね」

それから彼女は洗濯に掃除、そして夕食を作ってくれた。なんというか和食な所は良子さんそっくりだな、と思う。
「お。美味しい」
「さすがだねーさすが良子さんの娘さんだ。元妻より美味しいかも」
「あ、ありがとうございます…」
良子さんに引けをとらず本当に美味しいのでそのままの感想を言うと顔をうつむかせて照れる彼女、あぁ可愛い。まぁ親父の発言は無視するとして。
その後も和気あいあいと談笑しながら彼女はそんなの悪いです、と言うのだがそれを押しきって一緒に手土産として持ってきてくれたケーキを食べた。彼女はあまり表情を崩さないと言われるけどそんな事は無いと俺は思う、まぁ普通に比べるといささかその変化は乏しいけど。
「あの、じゃあもうそろそろ失礼させてもらいます」
「ん、今日はありがとねー」
随分この家に慣れてきて最初の堅さが抜けてきたのか少し感情的だった彼女のクールさが戻ってきた。うん、クールな所もいい。
「流ちゃん、これからヨロシクな」
俺もこれをきっかけに大分か緊張せずに話せるようになった、不謹慎かもだけど良子さんのおかげだ。ちなみに今日は土曜日なので明日も朝から彼女と会えると思うと気分も高鳴るというものだ。
「うん、秋田くんまた明日」
「ちょっとまった」
どうやら少し俺は強気になっているらしい。いつもの俺だったらこんな事言えないからな。
「壮児でいいよ、だってほら秋田ってこの家に二人いるだろ？まぁあいつは親父さんとでも呼んでやってくれ」
俺はそう言って笑ってみせた、やっぱり強気になってるみたいだ。

すこし彼女はきょとんとしていたけど、ふっとすこしだけ表情を緩めると

「うん、壮児くん。また明日」

　そう言って出ていく彼女の背中を見ながら俺は、あぁまた更に惚れちまった。としばらく硬直していたとさ

　そんで翌日なわけだが朝起きる頃にはすでに彼女が家に来ていた、鍵については良子さんには渡してあったので気にしていないがなにぶんまだ時間としては早いのでそのへん大丈夫なのかな？と思う。

別に彼女の家は言うほど遠くないのだがそれでも不安はいくつかある。

　まず彼女が学生という部分だ、良子さんは昼の間に来て色々とやってくれていたのだが彼女の場合そうはいかない。

夕方に学校から帰ってきて家の家事をしてもらうとしても朝の間にやっておかなければならない事もある、例えば洗濯物を干す事などだ。

良子さんの場合は昼の間にできるのだが彼女場合は学校に行くまでにやらなければならないのだ、その負担はでかいと思う。

しかも彼女の性格上おそらく仕事放棄はしないだろうのでさらに心配である。

朝飯については良子さんは夜のうちに色々と作っておいてくれたのだが彼女はどうだか分からない、ただ今日は作りにきているらしい。

まぁ日曜日だし俺達の朝起きる時間も遅いので大した早起きはしなくてもいいだろうが明日から普通の平日になれば洗濯物とかの面で更に早く起きて自分の支度をした後にうちに来ないといけないのだ、二度いうが彼女は仕事放棄はしないだろうのでおそらく無理をしてでもそれをすると思う。

まだまだ色々と不安な要素があるのだがそれを昨日のうちに親父と話し合った結果、妙案と言うべき案が出た。確かにその案だと彼女の負担はかなり減ると思う、だが代わりに他の弊害が出るのだが彼女の体の事を考えるとその案は確かにいいとおもう…それでもその弊害は中々ハードルが高い、とりあえずは彼女次第だった。
「住み込みですか…？」
「うんどーかな、僕的には君の負担を考えるとそっちのが良いかと」
そう、彼女に住み込みで働いてもらうのだ。
「良子さんには許可は頂いたんで後は君次第なんだけど…まぁ男二人の家に同居は不安だろうからね」
「お、俺は変な事しないから」
すこし考える素振りをみせる彼女、やはり年頃の女の子だしそんな簡単に決められる事ではないだろう。
「まぁ男二人の家に住み込みで働いてもいいっていうのなら今日にでも車出すから最低限の荷物を持ってくるっていう方向でいきたいんだけど…あ、大丈夫、流ちゃんの部屋は用意するから」
親父がそう説明するが流ちゃんはまだ考えている、ということは嫌ってわけではないのだろう。他に何か気にかかる事があるのだろうか？
「ウチに迷惑が――とか考えてるんだったら心配しなくてもいいから、むしろ大歓迎。あ、別に変な意味では…」
最後の方がゴニョゴニョともごったのはご愛嬌
「でも…」
「あ、ちゃんと一緒に暮らすに至っていろんな事にルール作るから。心配事があるなら無くすように頑張るよ」
「いえ、そういう事じゃないんですよ…」
「でもさ、今良子さんもいないしお父さんも単身赴任でいないんだろ？ほら、大勢で食べた方がメシはうまいじゃん？だからさ、どうかな？」
出来るだけ彼女に不安を与えないように笑顔で言う、別に下心が

全く無いってわけじゃないけど好きな人には幸せでいてもらいたいじゃんか。昨日帰り際にすこし寂しそうに見えたのも多分気のせいじゃないだろうし。

「…あの、実は、すこし憧れてたんです。壮児くん達の暖かい家庭に、本当に、二人のその、その家庭に私が割り込んでいいのでしょうかっ？」

すこし泣きそうにしながら言う彼女に俺と親父は顔を見合せる、口に出さなくても俺達は同じ意見だった。

「むしろ大歓迎」

クールビューティーと名高い彼女だけどそんな彼女も普通の子で、確かにクールな所は多いかもしれないけど一人っきりの家庭に寂しさを感じる可愛い女の子なんだ。

まぁそんなこんなでこれからこの可愛い家政婦さんとの生活が始まると思うと俺の胸は高鳴るどころか破裂しそうなんだがそれくらい楽しみって事で。

一話、家政婦さんと今後について話し合う（後書き）

次回は学校でのお話、の予定です。作者の気まぐれによりすこし変わるかも

二話、家政婦さんと登下校（前書き）

新キャラいっぱい出ます、三人くらい。はい。あ、それと前に前書きでコメディーばかりになりそうと書きましたがむしろラブな部分のが多い…まっラブコメだしいいですよね？まぁそんな長ったらしい前書きは置いときまして、どうぞ本編お楽しみください

二話、家政婦さんと登下校

神様ありがとうございます。
俺は宗教とかその辺に関しては日本人らしく都合の良いときに神様だらなんだらとかを持ち出してくるのだがとりあえずそんなどうでも良い事は置いといて俺は今非常に幸せというものを感じている。
「あ、おはよう壮児」
ドッキューンバキューン！（俺のハートが撃ち抜かれた音、二回くらい）うおっ！天使がっ！天使がぁぁ！エプロン着けた天使が台所にぃ！
「？」
突然床に転がり悶える俺に流ちゃんは可愛らしくまぁ無表情だけど小首を傾げる、秋田壮児にダメージ９９９。
「ふぁーぁ、おはよう」
俺が数秒悶えていると親父があくびをしながら食卓に座った、それを見て俺もふらつく身体を頑張って動かして椅子に座った。
さて、今さらだがまぁ読者諸兄もお気づきかも知れないが少し変わった事がある。それは流ちゃんが俺の事を呼び捨てするようになった事と雰囲気だ、まだ来たばかりの時は緊張でかクール度が三割程無くなっていたんだが、まぁおそらく無理して明るいキャラを装っていたんだろうそれでもやはりクール。昨日の内に大分打ち解けてきたのかまさしくクールビューティーと言うべき本来の流ちゃんの姿に戻ってきた。とは言ってもまだ一夜同じ屋根の下で寝ただけ（別に変な意味でなく）なので流ちゃんの本来の姿とかはまだ分からない、でも流ちゃんは案外感情を表に出したりする。まぁやっぱり普通より乏しいんだけど。
「これ、弁当です」
「おぉーありがとう、んじゃ僕は仕事行ってくるから」
そう言って親父はスーツをぴしっと着て家を出ていった、うんい

つまでたっても頼りない背中だ。
「壮児、早く制服着ないと」
「えっ？あぁおう」
それにしても本当に流ちゃんと一緒に暮らしてるのか…って、ん？流ちゃんが制服着てカバンを持って俺を待っているって事は…？
……一緒に登校？

(うわわわわあぁ！？)
俺が、俺があの流ちゃんと一緒に登校してる！？チラリと横を見てみると相変わらずの無表情で黙々と歩いている彼女、わぁお。
(なんて幸福！ありがとう神様っ！)
今の俺だったら何かの宗教に入ってしまいそうだ、それくらいこの幸運に感謝している。あぁ今ならどんな酷い事をされても許せそうだ、まぁこの幸福を邪魔する様だったら容赦はしないけど。
「壮児？上履き履かないの？」
「え？」
なんてこった、幸せに浸っていたら知らない内に学校着いてたなんて。バカな？まだ五分とて経っていないはずだ……俺ん家から学校まで歩いて２０分かかるけど。
まぁとりあえずそれは置いといて、廊下を自分の教室に向かい二人で歩いていると廊下で話していた奴がぎょっとした目でこちらを見たかと思うとまるで奇跡を目の当たりにしたかの様な顔をして教室に入っていった。その教室は俺の教室でもあるので俺も入る。
「おーい、春野ーちょっとー」
すると担任の女教師から流ちゃんが呼ばれた、なので俺だけで教室に入…なんだこの騒ぎ様は。
「秋田やりやがったな！」
「奇跡か！奇跡なのか秋田！」
「違うってただ偶然に一緒になったんじゃない？」
「しかしそれだけでもすごいとオレは思うな」

なんて言う意味不明な事ばかりわいわいと言うクラスメイト達だが一体俺がどうしたってんだ？
「壮児、一体どうやったらあの春野流と登校できるんだ？　もしや校門辺りで待ち伏せでもしてた？　ぷぷ！　勇気だしたな壮児！」
「ヒロ、違うって。僕的解釈では下駄箱周辺で出会ったんだと思うね、だってあの壮児だよ？」
「随分言ってくれるな貴様ら…」
喧騒の教室にある俺の席に座ろうと思い向かうとすでに俺の席なのに先客がいた、それは俺の友人である相沢(あいざわ)　弘人(ひろと)ことヒロと海藤(かいどう)洋介(ようすけ)
俺が席に座ろうとすると話しかけてきた二人だがどちらのセリフも俺をバカにした内容にしか聞こえない。
「んで？　なんであの春野流と一緒に来たんだ？」
「あ、それ僕も気になるんだけど」
他のクラスメイト連中はもう飽きたのかこの話題はしていないがこの二人は違う様で女子高生みたいに目をキラキラさせながら問い詰めてくる。
「…ふ」
「「ふ？」」

「ふふはははは！　お前達はこれを聞いたらとても羨ましがるだろうよっ！　なんて優越感！」
「ダメだこいつ、いかれてやがる」
「そんなに並んで歩いたのか嬉しかったの？　って、あ。真由理からだ」

……カタンと俺は椅子に座りヒロと一緒に彼女ありの小柄な可愛い系眼鏡男子である洋介をギリギリギリと壊れた人形みたいに首を動かして憎たらしい目で見た。ケータイ弄りながらデレデレした顔してんじゃねーよ。そして洋介はパタンと携帯を閉じて。

「どしたの二人共？」
どうしたんだ彼女もいないはおろか一方的な片思いをしている負け組男子二人よ、と俺とヒロには聞こえた気がした。ヒロは地面に崩れ落ちて泣いている。おい、そこまで悔しいか。
「ん？壮児なんでお前そんな負け組らしからぬ顔をしてられるんだ？」
パッと顔を上げて言うヒロにニヤリと口角が上がる俺、二人共になんだこいつ？みたいな顔しているがこの話を聞けば俺がそうなる理由も分かってくれるだろう。

「えぇ！？それって同棲じゃん！ある意味に僕より先に進んでるじゃん！」
「そっそそそ壮児の家に家政婦さんとしてててて片思いの相手が…ど、どんなエロゲーだよ…」
とりあえず事情を話すとまたまた女子高生みたいに目を輝かせて言う洋介に地面に更に崩れ落ち灰になったヒロは死んだような顔でそんなことを呟いていた。どんだけショックなんだ。

「秋田ー、私ちーっとおんもしろい事聞いちゃったんだけど」
崩れるヒロを跨いでとある女子生徒が話しかけてきた。
「す、鈴音！」
と、同時にガバッと起き上がるヒロ。なんだよヒロ…と早乙女（さおとめ）鈴音（すずね）はじり…とヒロから後退る、短い髪に女子としては高い身長に中々のスタイルと美脚の彼女はなんとヒロの幼馴染みでありヒロの片思いの相手である。姉御肌といった彼女はその整った顔もあり男子…より女子にモテてたりする。
「あ、そんでさ秋田。流からおんもしろい事聞いたんだけど、家政婦云々。マジ？」
抱きついてくるヒロを遠ざけようと頑張りながら早乙女はそんな

事を聞いてくるので俺は素晴らしい笑顔で頷いた、後捕捉だけど彼女は流ちゃんと仲がいいので色々と相談した事もあった。まぁどれも俺の勇気がなくて意味が無かったんだけど。
「へぇー、これをきっかけに頑張りなよ。そんであんたはさっきからキモいんだよ！！」
「ぐはっ！…鈴音、いい蹴りだ、しかし何故オレの愛を分かってくれない！？そして良い脚だ」
「うっせぇ！キモいんだよいちいち！」

「あらら、また始まったね夫婦ゲンカ」
「いつも思うんだけど本当にあれはヒロの片思いなのか？なんか長年つれそった夫婦ばりに息合うじゃんあいつら」
目の前でギャーギャー言い合う二人を見ながら俺と洋介はそんな話をしていた。

「おっしゃー帰ろうぜ！」
「あ、僕真由理と帰るから」
「ファーーック！」
そんなこんなで放課後、授業中とはうって変わって元気なヒロが嬉しそうに近づいてきたのに対し非情な言葉振りかける洋介。なんだコイツ達コントでもしてんのか？
「壮児」
ん？と後ろを見ると流ちゃんの姿。正直どっきり。よく見たら早乙女の姿もある。
「二人してどした？」
「いやなーにただ一緒に帰ろうというお誘いをだね」
「なにっ！鈴音、そんならオレと帰ろう」
「うっせぇ」
とりあえず早乙女からは話が聞けそうにないので（理由、夫婦ゲ

ンカ）流ちゃんにでも聞こうと思う。
「夕飯の買い出しいこうと思って…そしたら鈴音がなんかニヤニヤしながらついてきたんだけど…とりあえず買いだめも無いしスーパー行かない？」
「喜んで行かせてもらいます」
断る理由はございません。
「あ、秋田誘った？んじゃ私帰るわ」
「へ？」
「ちょ、鈴音待て！家近いんだから一緒に――！」
「あ、真由理来た。じゃあみんなまた明日」

風の様に全員が去っていった、取り残された俺達はとりあえずスーパーに向かったとさ。

「ご、ごめんなさい。私の仕事なのに」
「いやいや、こうゆうのは元より男の仕事なんだよ。流ちゃんが家事をしてくれてるだけで十分感謝してるよ」
家の調味料も含めた食材のストックが全然ないのである程度の物を買うと結構な量になったのでそんな物を持たせるわけにもいかないので俺が持って一緒に帰路についていた。食費とかお金の管理も流ちゃんはやってくれていて、今日買う物も随分予定を組んであったりその場で計算していた。そんなに頑張っている彼女を見て手伝いたいと思ったのも事実だ。
「そもそも私一人で買い出しには行く予定だったんだけど…鈴音が壮児も誘えって、こんなのやらせるつもりないのに…」
少ししょんぼりしながら言う彼女に俺ははぁ、とため息一つ吐いた。
「いやいや俺は流ちゃんと一緒に帰れて嬉しいし、手伝いも自分から言い出した事。流ちゃんは別に気にかけなくていいよ、むしろ力仕事なら大歓迎ってね」

「いやでも、雇い主に仕事させるのは」
「雇い主の事考えるんだったらむしろ手伝わせてよ、まだ流ちゃんは高校生なんだしさ。無理されたらむしろ困る」
そこまで言うとようやく彼女は納得した、ちょっと不服そうだけど。
「ほら、家族は助けあわなきゃさ」
「家族…？」
あり？失言だったか？まぁ彼女にはちゃんと家族あるしね、少しいきすぎたかな。
「ふふっ、家族か」
ん？と俺は顔を上げる、するといつもの無表情かとおもいきや少と思いきや珍しく笑う彼女、ヤバい。可愛いな、とつい視線を下にそらしてしまう。どうやら家族発言は受け止めてもらえたらしい。
「じゃあさ」
少し口角とかが緩んでいる彼女。微笑ってやつ？
「私は壮児って呼んでるんだから私のこと流って呼んでよ、家族なんだし」
そう言った彼女はやはり俺の目には天使の様に輝いていて、あぁやっぱり俺はこの子が好きなんだと再度思わされた。
「…お、おぅ。流」
いきなり呼び捨てはやはり気恥ずかしくて、初めての呼び捨ては少し目を逸らしながらだった。

そんなんでもやっぱりちょっとずつ俺も進歩してんなーと思う。

多分彼女との距離は縮まったと思う。

そんな春の夕暮れ時

二話、家政婦さんと登下校（後書き）

次回は秋田が今更な事実に気がつきます。

三話、家政婦さん鈍感疑惑とヘタレ今さら気づいたか（前書き）

なんか今回の最後の方は会話が少ない、秋田の思考が多すぎた。今回は前話とかと比べると少なめの文字数です。

三話、家政婦さん鈍感疑惑とヘタレ今さら気づいたか

今日は週末、言わずもがな気分は上がる……俺こと秋田壮児もいつもならそうだっただろう。だが今日はその週末の喜びを噛み締める前にとある事実を噛み締めなければならない事に気づいたのである。よく考えたら今更な事なんだが何故今まで気づけなかったのかがむしろ謎だ。

まぁそんな俺のバカさ加減は置いといてその俺が気づいた事について0話にもした前置き形式で説明しようとおもう。

まず今日の朝起きて気持ちの良い朝日を浴びる事はなく階段を降りいい匂いのする食卓の席に座り後から下りてきた親父を含めた三人で流の作ってくれた朝ごはんを美味しく頂いたわけだが、親父は時間も時間なので早いうちに家をでるのだが俺と流の場合は流が洗濯物を干しているのでその間俺はテレビを見て待っているのだ。もう一度言うがその時に流は洗濯物を干している。

そして次に家を出た俺達はたまに口を開きとりとめのない事を喋りながら学校に向かうのだが俺はその時ふと自宅を見た。干されている洗濯物、流の下着は少し目立たない所に干してあるがそれに比べ俺の下着は少し離れたここからでも見える。ん？とその時に俺は気づいたのだ。

「もしかして流は俺のパンツとかを毎日洗濯しているのか」

「…そりゃあ、家の洗濯全部任してるんだったらそうなんじゃない？」

という事にだ。つまり流が俺のパンツ…所謂下着を自分の下着と共に洗い更にその洗濯されているとはいえ俺の下着に毎日触れているのである。これは由々しき事態である。

「ははははは恥ずかしすぎりるっ！」

「…舌噛むくらい焦る事？」

もはや呆れ顔でこちらを見てくる洋一を俺はギンと睨み付ける。
「お前だってあれだべ！？今履いてるパンツとかを流がささっ触るかもしんないんだよっ！？洗濯機入れるときとかっ！あと今流が身に付けてるぶぶぶ…下着とかと俺のがもみくちゃになるんだようわぁぁぁぁあああ！！」
「うるっさいなぁ！このバカッ！」
突然怒鳴るかと思いきや立ち上がり悲鳴を上げる俺に周りのクラスメイトは
「なんだなんだ？」
「あぁ秋田か、どうせ春野がらみだろ」
「まぁ九十九％そうだろ、あのバカ」
「うるさいな、どうせ手が触れたとかそんなくだらない事なんじゃねぇの」と口々に言いたい放題言っているが今俺はそいつらに気を向けれる程冷静な神経をしていないのでスルーしておく。ちなみに流はトイレへ行っている為か教室にいない。
「壮児、とりあえず座っときな」
燃え尽きた俺は座り込む、そしてまたある事に気づく。
「親父のともみくちゃになってんじゃねーかぁ！あの野郎ぶっ飛ばしてやるー…！」
「壮児なにさわいでるの？」
ピタリ、と後ろからかかった声に俺は動きを止めた。後ろには声の主である流が無表情でこちらをみている姿があった、カァッと顔に血液が集まるのを感じるが流はそれに気づいても鈍感なのかよく分かってないようだ。
「なな流？」
「ん？」
小首をかしげる流に俺は癒された、体力回復しかし顔に集まった血液の量は変わらず。
「…なんでもない」
「ん、そう」

「…まぁ座りなよ」
「おぅ」
　自分の席に戻り早乙女と話を始める流を横目に俺は何か敗北感を感じた、言う事ないなら名を呼ぶなとヒロに言われた事があったなと無駄な事を思いだしながら俺はたそがれた。なかなかに虚しさが増長した。
「ところでいつの間にか春野さんの事呼び捨てにしてるよね」
「んぁ～そう、家族だからさー」
「はは、さっきので疲れてるのか」
　笑顔を浮かべる洋介だがその笑顔はなんだかとても楽しそうである、何故に？
「いやぁ、中学からの付き合いだけど未だに女の子に弱い壮児くんが随分逞しくなったなぁって。まぁまだまだヘタレの領域は抜け出せないみたいだけどね」
「誉めてんのかけなしてんのかはっきりしろやコラ」
　あっはっはと笑う洋介、可愛らしい顔して中々黒い奴なのである。
「壮児ー！洋介ー！聞いてクレー！ボタンを押してもジュースがでてこないんだー！」
　…こいつはただのバカだ。
「って鈴音！そういや下駄箱に男からラブレターが入ってたから俺が行って断ってやっとい…ぐびゃあああ！！」
　やっぱりバカだ。と俺は何しとんじゃ己はー！と飛び膝蹴りを早乙女に決められるヒロを見てつくづく思った。つか早乙女、さすがにそれ以上やると死ぬて。
「おっ、美しいミドルキック」
　洋介のそのセリフと共に予鈴が鳴った、ただしばらくヒロは起き上がらなかったという。

「どうしたの壮児？」
「い、いや別に」
その日の自宅にて、夜に洗濯予約をやっているのか洗濯物を洗濯機に詰め込んでいる流を見ながらおろおろしている俺。とりあえず気になった事を聞いてみた。
「あのさ、俺達のパー、パンツとか触って嫌じゃないの？」
「……？なんで？」
心底なんで？な顔をしている流、こんな顔をされては何も言えるわけがなかった。
「よいしょ…あ。壮児歯みがいた？」
詰め込み終わると彼女はこちらに振り向き突然そんな事を言ってくる、少し驚いたが歯はまだ磨いてない。
「え？まだだけど」
「ちゃんと磨く、わかった？」
わりかし真剣な顔をしてそう言う彼女についぷっと吹き出してしまう、するとむっとした彼女は洗濯機のすぐ横にある洗面台にある俺の歯ブラシを握ると歯みがき粉をたっぷりつけて俺の口に突っ込んできた。粉が多くて辛い。
淡いピンクの寝間着を着る彼女を見ながら俺はしゅこしゅこと歯を磨く、寝間着の時に流はブラジャーという物をつけてないので正直言うと年頃の男としては苦しいものがある。少しは俺の事を男として意識してもらいたいもんだ、無防備すぎる。
そういえば説明してなかったと思うが流の部屋は二階の俺の部屋のすぐ横に位置している、家具などは流の実家と呼ぶべき家からあの最初の日をフルに使って全部運んだが割と質素な部屋なのを記憶している。可愛らしいぬいぐるみがあるってわけでもなくピンク一色ってわけでもない、いつも整理整頓と掃除がされていて綺麗な部屋である。何故そんな事しってるかって？……ほら、好きな子の部屋だよ？思春期の男だったら誰だって見ちゃうでしょうよ。
ついでに俺の部屋の特徴を言っておくと流とは正反対にちらかっ

ている、理由としては流に唯一掃除をしてもらってない部屋であるからだ、いや俺がだらしないだけである。まぁ流に俺の部屋の掃除をされてしまってはベッド下のえっちぃ本が見つかってしまうので意地でもしてもらうわけにはいかない。

まぁそんな俺の下らない意地なんてその辺に置いといて、話を最初に戻すが今歯を磨き終わりさっきからテレビでやっている映画をぼーっとみている流は今この時にもその下には何も着けていない上半身の背中を無防備にも俺に向けている、これは信用されているのか誘っているのかもはや男として見られていないのかとかその辺は結局のところ俺には分からないが一つ言っておくと俺にはどうせ度胸が無いので手はだせないのである。

「ふぅ～終わったしもう寝よっかな」

と、俺がとりとめのない事を考えている内に流はエンディングロールのながれるテレビから目を離して立ち上がるとぐっと伸びをする。その際にへそがチラリと見えたりあんまり大きいわけではないが確かにある二つの丘が強調されたりと俺には刺激が強すぎるポーズを平然としてくる辺りが鈍感と言うべきか。

三話、家政婦さん鈍感疑惑とヘタレ今さら気づいたか（後書き）

次回は家政婦さんと秋田が買い物に行きます。

四話、家政婦さんとお買い物（前書き）

なんか今回が今までで一番コメディーだと思います。なんというか週末更新が板についてきた今日この頃

四話、家政婦さんとお買い物

なんというか日曜日な今日、いつもなら明日から学校かよーとテンションがただ下がる中で何かをするそんな日に。定番となりつつある始まりだが俺こと秋田壮児はテンションがマックスというより天に昇りそうである。

まぁその理由は聡明なる読者諸兄には分かりきっているだろうが俺の恋い焦がれる春野流がもちろん大きく関わっている。

もう少し具体的に言うと今私服の流と同じく私服な俺の二人で…二人でデパートにお買い物に来ているからだ。

そう、周りから見ればまるでどこにでもいるカップル。

そんな状況を喜ばないわけがない。

ちなみに誘ってくれたのが流かと思うとその喜びは2乗したくらい跳ね上がる、ただ恥らしさを感じられなかった所を見ると俺に恋愛感情を抱いていない事が分かる。　その事実に心はかなりのダメージを負うのだがそれはこれから先頑張ればなんとかなるかもしれないし今はこの喜びを噛みしめようと考えなんとか持ち直した。

まぁそんな事はさておき今俺達二人がいるデパート通称『シティマート』はこの辺りで一番でかく、服や靴とかはもちろん色々な物を扱う店がいっぱい中に詰め込まれた学生はもちろん老若男女が利用する超便利な所である。シティマートなんていうあだ名みたいなものを誰がつけたなんて知るよしもないが遊び所としてはかなり無難な所なので日曜日は結構な人がいてレストランや便所は混んでたりする。　そのシティマートに俺達二人が何をしにきたと言うと先程言った気もするが買い物に来たのである、梅雨も中盤辺りで気温も上がってきたので今の内に夏物の服を買っておくかという話になりデートと言えなくもない二人でのお買い物にきたというわけだ。

別に服だけでもなく生活用品や女性の…まぁ、あーゆうのとかも買

うのだが。むしろそっちのが彼女にとってはメインなのかもしれない、そんな事は本人にしか分からないのでなんとも言えないのだが。
「壮児、夕飯ここで買ってこっか」
「ん？あぁいいんじゃない？」
とりあえずさっさと服買いに行きますか、と歩きだした所で
「あり？壮児じゃん、って二人？」
「あらら？デート～？」
あ、鈴音。と隣で流が言うのを聞いて彼女が見ている方向をチラリと見ると聞きなれた声と共に二人の友人の姿を見るのであった、まる。
「早乙女と……ヒロ…か」
「なんでオレの名前を言うときだけ苦虫をなんたらな顔すんの！？」
あ、バレた？露骨に嫌な顔しすぎたかな
「あんた頭悪いんだから難しい言葉無理して言おうとしなくていいんだよ」
相変わらずなヒロに対する毒舌をかます早乙女は流の名前を呼びながら流に近づいていって仲良く喋り始めた。なんかからかってるみたいだがポーカーフェイスなままの流を見ていると俺関連の話でない……と信じたくなる。つまり何で秋田といるの？とからかわれて無表情って俺の事をなんとも思っていない事に…ダメだ！考えるな秋田壮児！と悶えているとヒロが近くに来ていた。
「おい壮児、仲良く二人でデートか？ふっ、成長したな」
「いちいち腹立つな貴様」
なんで上から目線なんだよ、つか足ちょっと引きずってるみたいだが俺達と会う前に早乙女に何かいらん事したんだろ。
「ちょ、秋田ー私もちょち買い物に付き合っていいー？あ、オッケー？悪いねぇ」
まだなんも言ってないじゃん！
「お、おい！ならオレもついてく！いいよな壮児！」
お前は許可しなくてもついてくんだろどうせ！

「私は別に良いんだけど、壮児はいいの？」
おぅっ、眩しいぜ女将。じゃなくて流。君が良いって言ってんなら俺がダメって言えるわけないじゃないか。なんて思考をする前に頷いてたわけですが。
「お前ぜってぇ尻にしかれるわ」
てめえに言われたかねぇよ。

「ふっ、奴も女子高生よの」
「おい、あんまじろじろ見んな。捕まる」
デパート内に点々とあるベンチにすわる俺とヒロ、ヒロは先ほどからずっと早乙女の方をガン見している。
俺も流の一挙一動を見たいという気持ちはあるがそれをできない理由がちゃんとある、諸君はランジェリーショップなるものを知っているだろうが流と早乙女は今その店の中で所謂下着という物を見ている。その店内にいる彼女達を外から見ていれば周りからはランジェリーショップを真剣な眼差しで見る犯罪者予備軍あるいは特殊な嗜好をもつ男という不名誉なレッテルを張られるだろう。
良くても健全な男子高校生だが警備員さんに連れてかれる可能性が大いにあるのでそろそろやめて欲しい。
「あ、春野が試着するみたい」
「なにぃぃ！」
前言撤回、俺はゴキリと嫌な音を鳴らすくらいの勢いで首を回す。しかしもちろんと言うべきか試着室は外から見えない様になっている、チラリズムは期待できない。
「壮児…オレ達は彼女達の連れだろ？店にはいる権利はあるんじゃないか？」
「ひ、ヒロ…」
あぁヒロの目がキラキラと輝いている、なんてこった。あのヒロが爽やかに見えるぜ。

「よし、いこうぜ」
「あぁ、これは許される事なんだ」
そうして俺達は店内への一歩を踏み出した。
「よし待とうかキミタチ」
ガシッ！と肩を捕まれたので振り向く、青い服のおじさんがズゥゥゥンな感じな効果音と共に立っていた。あとゴゴゴゴって感じな効果音もあるかもしれない。誰だ警備員呼んだの。
「おじ様、違うんですよ。これは決して犯罪ではない」
「そうですぜ、オレ達には権利が…」
「わかったわかった、おじさんはわかっているよ」
おぉ話がわかるじゃないかおじ様！あんたも男だぜ！そんでもってあなたみたいな人に出会えて俺達は幸せ者だ！
「だから話の続きはおじさんの部屋でしようか」
前言撤回、やはり俺達はわかりあえないようだ。ドドドドドな効果音と共に三人の間に不穏な空気が流れる。
「さて壮児」
そんな空気の中切り出したのはヒロだった。
「ラーメン食いにいくか」
結局質素な警備員室に連れてかれたのは言うまでもなかった。BY秋田
「へへへ、一時間もあそこにいたのか。いい思い出だな」
「本当にそんな事思うんだったら精神科にいく事をオススメする」
一時間も警備員さんとお話もとい質疑応答をしてなんとか無罪放免となり解放された、今は彼女達二人を置いてきてしまったので捜索中である。
「しっかし人が多いなこんちくしょう」
今日は日曜日である、当然このシティマートは人で溢れていた、もはや迷子の呼び出しをした方が見つかりやすいかもしれな…

『迷子のお呼びだしをします。高校二年生の壮児くん、ヒロくん。お友達の方が…』
「なんでオレあだ名！？」
「着眼点ちがくねっ！？」
とりあえず迷子センターなる所に向かった。ついた先で見たのは…
「やっほー迷子諸君～」
「「お前かよっ！」」
ニッコニコの笑顔で手をふる洋介だった、何がしたいんじゃコラ。
「壮児達がいなくなって、探してたら偶然会った」
「そんで探してる事言ったら迷子センターに呼びだそうっていうナイスアイディア出してくれてさー」
洋介一人かと思ってたら流と早乙女の二人が出てきた、つか呼び出しを考えたのは貴様か。
「んで何してたの？」
「つかお前何してんの？」
ケラケラ笑いながら洋介は質問してきたので逆に質問した、だって一人でこんな所にいる奴ってそうそういないじゃん。
「いやそれがさー真由理とケンカしちゃってあいつ先に帰っちゃったんだよねー」
「あ、ノロケ始まるわ。聞かんだら良かった」
「ムッ、じゃあ結局お前らは何してたんだよ」
少し頬を膨らませながら洋介、なんだその顔は、そういう所が母性をくすぐるのか？だからモテるのかお前は？多分横にいるヒロもそう考えているに違いないと何故か思った。
「そうそれ！連絡ぐらいよこしなさいよ」
「壮児電話出なかったでしょ」
洋介に責められる覚えはないがこの二人に言われるとなんとも言えなくなる、まぁ別にごまかす様な事でもないが。
「実は…」

「アッハッハハハハッハハハ！！」
「笑いすぎだろ洋介！」
「しばくぞてめえ！」
多少アレンジを加えたものの（試着が見たくてとかその辺は割愛した）先程の話をすると洋介大爆笑。無性に殴りたい。
「バカだな…」
「…はぁ」
ちなみに流はため息、早乙女はボソッと一言というなんとも厳しいリアクションをしてくれた。簡単に言えば呆れています。
「あーもう！帰る！」
「ヒロ待てよ、ちょっと服買ってこうや」
とりあえず俺は当初の目的を達成しようと思う。

「ぐおおお重いー！何故にオレまでがーっ！」
その日の帰り道、俺と流はもちろんヒロと早乙女までもが俺の家に向かう。ついでに流と早乙女が買った荷物はもちろん夕食の材料がはいったおもーい荷物を一生懸命運ぶ俺とヒロの姿があった。
「てか本当に夜ご飯頂いちゃっていいの？」
「壮児と親父さんがいいって言うのなら別に…」
「は、はは。親父も二つ返事で良いって言ってるからオッケーだよ」
そう、今日はなんと早乙女とついでにヒロが俺の家で夕食を食っていくのだ。提案したのは俺だし流も喜んでいるようだから親父がなんか言ってても関係ない。まぁあの親父の事だから心配などしていなかったが。
「流の料理おいしいよねー秋田。ほんと幸せもんだわ」
「鈴音って春野の料理食った事あるんだ、つか鈴音は絶対に手伝いするなよ、大変な事に…」
ドコッ！とヒロの腹に後ろ回し蹴りが炸裂した、崩れるヒロ。やめてくれよ、食材がダメになったらどうするんだ。
「小学校ん時とは違うんだよ！私だって成長してるっつーの！」

「はっ！どーだか、オレは今でも忘れらんねーんだぞ！」
「あの時はジャガイモの芽なんて知らなかったし牛乳よりヨーグルトの方が美味しいかなって思ってたんだよ！あと人参の皮剥きを忘れたりルーが溶けてないのに気づかなかったりしただけ！」
「だけじゃねーよ！そんだけで相当だよ！死ぬ思いしたんだからな！」
ギャーギャーと周りを気にせず騒ぎ出す二人、俺と流は呆然とたっているだけである。
「シチューかな…？」
「だろうな、つか早乙女。ジャガイモの芽はちゃんと取れよ」
あいつらに聞こえないだろうけど流とそんな会話をしていた。しばらくすると二人共にムッとしているが俺の家に向かった、どうせすぐ元に戻るだろ。

「流美味しかったよ～ごちそうさまでしたーとお邪魔しましたー」
「壮児、お前がますます羨ましくなった」
そんなこんなで夕食も食べ終わりヒロと早乙女は帰る事になった、玄関で二人はそんな事を言うとドアを開けてお邪魔しましたともう一度言うと帰っていった。外から
「鈴音とは違うな」
「だから今はまだマシだっての！」なんて会話が聞こえるのであいつら仲良いなーとまた思った。流も横でクスッと笑ったので多分同じ事を考えているのだろう。
「いやー今日は騒がしかったなー」
「でもご飯は多い方が美味しいよ」
夕食の片付けを手伝いながらそんな会話をする。なんかこうしてるとホントに流が家政婦として来てくれた事に感謝したくなる。何故か？そんなの仲良くなれたからに決まってるだろ。
「あ、壮児フライパンは後で洗うから置いといて」
「え？おぅ」

ちなみに洋介は彼女と仲直りしてくるとかいって俺ん家には来なかった。え？ 聞いてないってて？

四話、家政婦さんとお買い物（後書き）

次回は学生の悩みの一つであるテストがテーマなお話

五話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・前編（前書き）

週末更新？なんとかペースを落とさないようにしたいです。つか早くしないと。まぁそれは置いときまして、今回は作者の気まぐ…ゲフン、事情により前後編になってしまいました。なんだかんだで文字数は少ないです。

五話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・前編

「お前らにーすぐそこに近づいている逃げれない現実を教えてやろうと思う、てかこの中の何人が『それ』に気付いてないふりをしてるかは知んねーが……テストまで後一週間しかねーぞ？」
月曜日、やっと帰れるぜーな気持ちになる最終授業。俺のクラスは担任が授業を担当する英語がその最終となっていた、チャイムがまだ鳴らないというのに授業を終わると言った担任に俺達は歓喜したが先程のセリフでその歓喜とした雰囲気は掻き消されてしまった。それだけの衝撃だった。
「先生ーっ！」
面白いくらい静まりかえった教室の空気を切り裂く様に色をつけるなら黄色な声が響く、黄色と表現したのはただやかましいという理由である。まぁそんな色云々は置いといて天高く手を伸ばしながら叫んだヒロに教室中の視線が集中する。そして何を言うかと思えば――
「カンニングって文部科学省は何回まで許してましたっけ？」
文部科学省が何かよく分かってないくせにふざけた事口にしてんじゃねーっ！と彼の幼馴染みが飛び蹴りした事に担任は咎める事はなかった。
「もうそんな時期なんだねー」
呑気な声で危機感を感じさせない声色の眼鏡美少年、成績常に上位の人間の余裕を見せられて万年平均以下をさ迷う俺こと秋田壮児には嫌みにしか感じられないのは仕方がないと思う。クールな流は帰りの支度をきびきびと始めている、周りが学生の悪魔に対して悲痛な叫び声を上げているのに対してそのいつもと変わらぬ一挙一動も成績上位者という確かな事実が関係しているのだろう。この目の

前の嫌み眼鏡の様に。だが流は許す、何故かって？かわいいからさ。
「壮児は今回勉強してる？まぁいつもみたいに途中で挫折するんだろうけど」
眼鏡を拭きながらそんな嫌みを言ってくる洋介、なんてこったその美顔も勝ち組たる由縁か。何を意味分からん事を考えているのだろう。
「どうしてこうこの学校の顔が良い奴は勉強ができるかな」
そんな俺の呟きに近くの男子グループもうんうんと頷いている、理不尽な事である。学年一位のスカしたガリ勉君も中々のイケメンなのだ、羨ましいことこの上ない。
「あぁなんでこんなにも世界は不公平なんだ」
近くの男子グループもうんうんと頷いている。
「でも壮児ってなんだかんだで学年五大美少女の一人で難攻不落な娘を他の連中に対して大差をつけて攻略してんだからひがむよりひがまれる立場なんだよね」
笑顔でそう言う洋介に近くの男子グループはブンブンと頷いていた。
おい、近くの男子グループ。さっきから立ち聞きしてんじゃねーぞ。
「まぁその五大美少女のうちの一人は僕のなんだけどねー」
「やっやめろ！暴動が起きる！」
アッハッハッハと笑いながら言った洋介だがお前は気付いていないのか？この近くの男子グループから送られる殺気光線が。
そういえばだが洋介の彼女である真由理…あまり喋った事がないし名前しか知らないのだが、その真由理嬢はこの学校の二学年五大美少女（どんなものかは文字通り）の一人らしい。そんなに有名なら名字くらい知ってるだろって？流しか興味無かったし今更気にならないのでその辺は置いといてくれ。まぁいつか紹介する時がくるかもしれない。
「壮児、まだ学校に残る？」

ふと、流がそんな事を聞いてきた。殺気光線とかに気をとられていて気付かなかった、そんなのはどうでもいい。
「流が帰るなら帰るよ」
「ん、じゃあ私ちょっと学校に用事あるから待ってて」
「おっけ」
そんな会話をして流は教室を出ていく、その小さな背中を見送ると俺は洋介の方へ身体を向けた。
なんか洋介がニヤニヤしてて殺気光線が俺に矛先を変えている。
「へー、随分仲良くなったんだねー。最初は顔を見ただけで真っ赤になってたのにさ」
そう言う洋介に裏切り者だら仲間だと思ってたのにだとか言ってる男子グループ、なんじゃお前ら。
「一年の頃の壮児に今の姿を見してやりたいよ、多分信じないだろうねー自分でもヘタレって自覚してたし」
「…中学一年の頃のお前にその毒舌っぷりを見せてやりたいよ、あの頃は『まだ』可愛いかったのになー…」
「あはは、皆僕の事女の子と間違えてたもんね。ま、ヒロはあの頃から鈴音ちゃん一筋だったけど僕に抱きつかれて喜んでたよね」
「あぁ、あったなそんなのも」
中学時代に出会った俺達だがヒロは今と変わらず…いや今の方がバカかもしれない。あと洋介はまだ腹が白かったのに……いやどうだっただろうか。
「あ、そうだ。これ言おうと思ってたんだけどさ」
突然話を切り替えた洋介に俺は視線を向ける、良い笑顔をしてる。
「勉強教えてーって流ちゃんの部屋入れるんじゃない？」
ズババァァン！背景にそんな効果音と雷！なんてこった！
「ふぉぉ、なんてこった、そんな裏技が…」
「しかも二人っきり」

ブバァ！と俺の鼻から鼻血が噴出した、何故かって？二人っきりなシーンを妄想したからさ。
『もー壮児そんな問題もわかんないの？（妄想のため少し表情が豊か）』
『え、こんなのもはや暗号じゃん』
『これはこれをこうしてあれを…（ズイッと近づけられる顔）』
『お、おぅ（ドギマギしながら少し視線を下にする）』
『聞いてるの？（ちらりと見える胸元）』
鼻血ブー。
以上が鼻血を噴くまでに脳内で繰り広げられた妄想の具体的なものである。
（いや、まてよ）俺は鼻血を抑えながら思った。
『どうやったら覚えるの？』
『えーと…ご褒美があったら頑張れるかも』
『仕方ないなぁ…じゃあこれ解けたらキ・ス・し・て・あ・げ・る（ハートマーク）』

「そっ壮児ーっ！」
血溜まりに顔を埋める俺はそんな洋介の叫び声を聞いた。THE・貧血。

「なんか青い顔してるけど？」
「あ、気にしないで、ただ妄…ゲフン！テストに絶望してるだけだから」
？マークを頭上に浮かべる流、現在用事の済んだ流と帰宅途中である。
なんとか流がくるまでに奇跡の生還を果たした俺は血が足りなくてふらつく頭と身体を頑張って動かしてなるだけ平然とした顔で爽やかに用事が済み教室に戻ってきた流を出迎えた。
教室内の一角に血溜まりを放置してきてしまったが多分誰か掃除し

てくれてるだろう、壮児の鼻血を掃除。血が足りないくせにバカみたいな洒落を思い付く俺の頭に拍手喝采。ちなみに俺は後になって聞いたのだが早乙女のいつも通り鋭いツッコミをくらい吹き飛んだヒロが血溜まりに頭から滑り込み血まみれになったヒロをみて早乙女がかなり焦っていたらしい、洋介情報である。

「テストかー…壮児って成績悪いの？」

俺の歩くスピードがいつもより遅いので少し先を歩く流がくるっと振り返りそんな事を聞いてきた。ふっ、成績良かったら顔真っ青にならねぇぜ？あ、真っ青な理由は妄想過多のせいだった。

「へへ、下から数える方が手間がかからないんだよな」

鼻下を指でこすりながら俺は言う、これは『へへっ』という照れ笑いにもっとも適していると俺が考える仕草である。どうでもいいね。

三点リーダな無表情を浮かべる彼女の顔は少し呆れが含まれている気がした。つか含まれてる。

「……壮児は帰ったら勉強ね」

冷たい声色で言う流、おいおい冗談きついぜ。俺には家事を行う流を視姦…でなくて観察するという重要な予定があるんだぜい？

「分かった？」

…どうやら顔に出ていたらしい。だって勉強キライだもんと嫌々オーラをだすが流の放つ絶対零度なオーラに打ち消された、気がする。

「やらないと晩御飯抜くよ？」

にこりと珍しく笑顔を見せた流だがなんか黒いですぜその笑顔。でも可愛いから気にしない。

「えぇ～？」

まぁとりあえずそんな一言というより不満そうな声を口にしといた。

なんかたまに流が保護者みたいになる時があるがそれは世話焼き

という事か？ まぁそんなトコも好きなんだが。

そんなわけで後編に続く。

五話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・前編（後書き）

テストと勉強のお話、後編に続きます。

六話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・後編（前書き）

なんというか…題名と合わない内容な気がする……まぁとりあえず後編投稿、おもったより文字数ふえちゃったので（話の流れが途中で横道にずれたりしたため、簡単にいえば作者の実力不足）前後編になったという裏話があるわけですが。そんなのはおいときまして本編をどうぞ。

六話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・後編

「うぐ…ぅ〜」
　惨めにも呻き声を上げるのは俺こと秋田壮児、何故呻き声を上げているかって？それは俺の目の前に鎮座するテキストブックまぁつまり教科書なんだが、それとノートと筆記用具。それら諸々が俺に苦痛を与えているからだ。
　そもそも頭の悪い人間は勉強に耐えるという機能が弱いのである、なんて言い訳をしてみるが問題の解決にはなりえない。流が夕食を用意している間は自分で勉強しといて、後になったら見てあげる。と嬉しい言葉をくれたのだがだいたい頭の悪い人間が一人で勉強というのはいささか厳しいものがある、これに共感してくれる人は少なからずいると信じたいものだ。
「さぁ！勉強するぜ！」
　そんな戯れ言はどこかナイジェリア辺りに置いといて俺はシャーペンを手放し寝転んだ、ちなみに一文字…どころか記号に数字も書いていない。つまりシャーペンの芯は一ミリも削れていないというわけだ。こうなるのもしょうがないと思うのは俺だけか？んなわけないか。多分。
「ふぅ。『洋介へ、勉強がはかどりません。流もいません。どうしたらいいですか？』っとな。ポチ」
　とりあえず携帯を取りだして結構自信あるタイピングを駆使して洋介にそんなメールを送る、効果音まで付けてしまったがとてもむなしくなった。
　一分も経たない内に返ってきた、早いなコイツ。
「んーとなになに『とりあえず流ちゃんに教えてくださいって言え。そんでさりげなく隣に座る、前はダメだよ。何故って？流ちゃんと密着したいでしょ？んで次はさりげなく肩に手を……（中略）』な

がっ！！あの短時間でよくこれだけ打てるな」
独り言に独り言を重ねて虚しさ倍増、流早く来てくれ。メールの返事をするのも面倒なので携帯を閉じて無造作に置いといた、さぁ何して時間潰そうか。
なんて思っていたら質素なエプロンを着けお玉片手に腕を組む流が俺を見下ろす様に立っていた、なんか隠していたテスト用紙を母親に見つかった時みたいな言い知れない焦燥を感じる。効果音つけるならゴゴゴゴゴみたいな空気が流れた。
「…勉強は？」
たったそれだけの一言だがなんとも言えないプレッシャーを感じた、なんか流がオーラを纏ってる気がする。ちなみに俺はと言うと上半身を起こして苦笑いを浮かべている。
沈黙する俺達、しばらく経つとため息一つ吐いて隣に突然座ってきた。瞬間視界が霞むくらい心臓が弾んでしかも顔が真っ赤になったのだがそんな俺に気付いた様子もなく流は口を開く。
「どこがわからないの？教えてあげるから」
夕食の用意は一段落ついたらしく少しの時間こちらの勉強に付き合えるらしいが、それよりもこの流の無防備な所に俺はかなり精神にダメージを与えられているのだが流は露知らずと言うべきか少し疑問をふくんだ視線をこちらに向けている。こんな時に俺が一線を越えて色々とやらかさないのは理性を保てているからかそれともただ単に度胸がないだけか。
「…？壮児聞いてるの？」
「ん？あぁ、んじゃあここのさ…」
その二つは理由ではない。そう思った、それは目の前に純粋無垢な瞳があってとかそんなのもあるけど。理屈とか抜きに泣かすような真似はしたくないな、と思った。
ただそれだけ

「ってわけでまた一つ俺は成長したわけだ」
　翌日、教室で俺は洋介を前にそう言った。あぁそう、と呆れ顔で流す洋介。昨日どうだったと聞いてきたのはお前だろうが。
「なんていうか…ノロケてくるね」
「てめえに言われたくねぇよ！」
　苦笑いで控えめに言う洋介だがよくそんなセリフが出てくるものだ、自分がいつもしてる事を思い出してみろ。
「だって昨日また真由理とケンカしてさー、幸せそうにそんな事言われてもさ」
「お前が聞いてきたじゃんっ！」
「あれ、そうだっけ」
　数分前の事をもう忘れたのか？素晴らしい脳みそだな、欲しくはないがな。
「まっとりあえず自分の気持ち再確認できたって事だね？かっこいいねー全くー」
　肘でうりうりーと意味不明にグリグリしながらそんな事を言う洋介、早く仲直りしろ。

　そんなこんなで休憩時間は終わり授業の始まりを告げるチャイムが鳴り響く、それを聞くとあちらこちらで固まっていた奴等は自分の席に戻り座った。一部まだ遊んでいる生徒はいるが。
「おーっす、どうだーお前らテスト勉強頑張ってるかー」
　教室に入ると同時にそんなセリフを吐きながら担任である女教師が教壇に立つ、先日テスト一週間前（死刑宣告ともいう）を告げた教師でもある。
「毎日三時間やってまーす」
「毎日三時間マイナス三時間やってまーす」
「ゼロ時間やないかい！」
　騒がしいマイクラス、いつもこんな感じなので教師達には問題クラスとして写っているらしい。

そう思われる理由の中には先程のように漫才を繰り広げるバカ等も入っているのだが、ヒロと書いてバカと読む野郎とその幼なじみとの夫婦ゲンカもとい夫婦漫才も理由の中に入っていたりする。担任から聞いた話だ。

あと『とある女の子』にゾッコンの一途少年の突然の奇行も少なからず入っていると言っていたがいったい誰の事かはわからずじまいだった。ちなみに奇行とは突然鼻血を出したり悶えだしたり『とある女の子』を見つめて話しかけても反応を返さない等々らしい、なんか聞いた事がある様な不思議な感じになったが気のせいという事にしといた。

「あいっかわらず騒がしいねーウチのクラスは」

「机の上で足を組みながらゲームするお前は何にも言う権利ねぇよ」

不幸にも俺の横の席にはヒロもといバカが在席している、今もこいつは教師をなめきっているとしか思えない態度で携帯ゲーム機をポチポチといじくり回していた。

まぁ、担任の女教師が教師らしからぬ不真面目な人だからこんなに騒がしかったりなめた態度をとる奴が出るのかも知れない。

「んじゃーテキスト――」

そんなクラスの事は置いといて俺は日課の流を視姦…観察をするとしよう。

今日もいつものごとくそのクラスは騒がしかったり暴行（主に優秀な女子生徒がとある男子生徒に対して）をする生徒がいたり、授業中にも違うクラスの彼女とメールをする男子や一点を見て和んでいる変態が日々を過ごしていた。

ただクールビューティーな人は真面目に板書はもちろん教師の話をちゃんと聞いていた。

そうして今日も放課後を迎えた。

「鈴音ーっ！一緒に帰ろーっ！」
「一人で帰れ」
いつも通りのやりとりを聞きつつも俺は流へ向かい机の間をぬって歩いた、短髪野郎ヒロが（今更かもしれないがヒロは短髪である）何かしたのか空を舞って俺の上を通過していくという事があったもののとりあえずは何のイレギュラーもなく流の元にたどり着いた。
「流、帰るか」
「ん、ちょっと待って。あ、帰りにスーパー寄りたいんだけど」
最近ではすっかり日常になった会話をしながら俺は引き出しから教材を取りだしてカバンに入れる流を待つ、クラスメイト達も最初は物珍しそうに見てきたが最近では興味が無い――少し呆れが入った視線を送ってきたりした。
この反応は授業が終わると同時に彼女を教室まで迎えに行く某メガネ少年に対する反応に似ている気がするのは何故だろうか。
「行くよ？壮児」
「ん、おぅ」
クラスメイトの反応なんかぶっちゃけどうでもいいのでさっさと帰路につくとする。

校門を出るとすぐ目の前に普通の道路があるがもちろん歩道もあるのでそこを歩く、西高校…通称ニシコーの（俺達が通う高校の事）グラウンドをフェンスごしに見ながら二人で歩く。周りには俺達と同じく帰宅部の連中がパラパラと互いに距離をとりあいながら歩いている、中には三人組で仲良く喋りあう奴等もいれば一人で黙々と帰る奴もいる。
部活動に励む生徒の声を聞きながら帰宅部は帰る、そういえば正式に帰宅部を作ろうとして校長に却下された人間が同級生にいたなと思いだす。大して仲がいいわけではなかったので活動内容まではは把握していないが常日頃からどこかぶっ飛んでいるコメディー野郎らしいのでおそらくヒロみたいな奴なのだろう。あえて言っておく

がこれは伏線ってわけでなく、この名前不詳のコメディー野郎はこれからも表舞台には出てこない。
「そういえば壮児は部活してないよね、何で？」
ちら、とグラウンドを見て思い出したように流がそう聞いてきた。知っていただろうが俺は帰宅部です、ヒロと洋介も帰宅部であり洋介に彼女が出来る前…つまりというか一年生の前半は三人で帰りながら自分の恋する相手について喋っていたものだ。ただ洋介は最初の頃、真由理嬢に恋する自分を自覚していなかったが。まぁ今となっては…。
「ん〜何でと言われてもなー」
何でだっけなー、と思いかえしてみる。運動はできないわけでないので中学では運動部に所属していたものだが。
「そういや流って部活やってんの？」
全く一年生の頃に部活に入らなかった理由が思いだせないのでふと思っていた事を彼女に聞いて話を逸らした、今までに部活行ってる姿を見たこと無いし入っていると聞いた事も無い。流について色々と調べた事のある俺だが分からない事もあるのだ。
「入ってるよ、滅多に行かないけど」
らしい。って入ってんの！？何部さ！
「料理部」
さいですか。それにしても基本的に真面目少女な彼女が部活動とかそういうのに行かないというのも意外である、あぁ家政婦の仕事とかも関係してるのかも。
「仕事とかで行けないんなら別に遠慮しなくてもいいのに」
「ん？別にあそこにはたまに行くくらいだったから」
俺が言ったのに対し随分あっさりと答えた流、君がいいんなら別にいいけども。そこで良い名案というべきかな、あることを思い付いた。
「じゃー久しぶりかどうかは知らないけど今度クラブ行きなよ、たまには自分の好きな物を作りたいとか思うだろ？」

「ん～…じゃあまたいつか行こうかな」
「俺も行っていいかな？」
「…？別にいいけど」
ザ・ラブラブ二人で部活動！計画！
とりあえず色々と流の事を知らないとな、まぁ二人っきりまではいかないだろうけど学校ではあまり流と関わる場面が少ないからこーゆうきっかけを作らないとな。某メガネ少年談。
「んじゃスーパー寄って帰るとするか、帰ったら何しようかなっと」
「壮児、テストの事忘れてるでしょ」

「あ」

それからテストが全て終わる日までクールビューティーな先生に勉強を強制…教えてもらっていた事は言うまでもないかもしれない。
あと俺が部活に入らなかった理由は入学式に恋した相手と同じ部活に入ろうとしていてなんだかんだでズルズルとここまで来たという事を後々思い出した、まぁもちろん流の事なのだが……どこに所属しているかはつい最近まで謎だったのでズルズルとなってしまったのだろう。

―そんでもって後日談。

「秋田ぁ～今回中々上がったじゃねーか、次も頑張れよ」
テスト返しが始まりテストが半分くらい返ってきている水曜日、その日のＨＲにまだ返ってきていないテストの点…まぁいちいたそんな言い回しするのをやめると全部のテストの点数、そしてクラス順位、学年順位…ｅｔｃが書かれた紙切れを担任からわたされた。
結果はクールビューティーな家庭教師のおかげか上の下辺りまで成績は上がっていた。

ちなみに流は学年のベスト３に早乙女はベスト８、洋介は１１位でヒロは…言わないでおこう。ただ下から数えると圧倒的に早い。

結果を流に教えたら結構喜んでくれていたので今更だが頑張って良かったと思うようになった。

六話、家政婦さんとテスト勉強がしたい・後編（後書き）

次は「オムニバス家政婦さん」、短編を数話固めてみようと考えてます。まず入学式の話、掃除の話…あとは作者の気まぐれで。

七話、オムニバス家政婦さん（前書き）

短編集？な今回。一ページ目が入学式、流との出会い。二ページが流が壮児の部屋を掃除する話、三ページ目はちょっと変わった形式の「日常シリーズ」と授業風景の話。

七話、オムニバス家政婦さん

壱

「入学式のあの子」

春、俺こと秋田壮児は桜……はもう散りまくっているがとりあえずポツポツ桜の木がある普通の道を歩いていた。まだ真新しい制服を身に着けての初めての登校、西高校もといニシコーに向かう俺。

あえてさっさというが今日は入学式だ、何を隠そう俺の。

「いやー素晴らしい青空だ」

普段めったに見ない空をふと見上げるととても綺麗な快晴の空、これだけ青いと清々しいものだ。俺の晴れ舞台のために用意されたのかと勘違いしてしまうね。

「おーい壮児待てよ！」

「だからヒロ！なんであんたはそんなだらしない格好で出歩けるのよ！」

後ろから中学から聞きなれている二つの声に振り向くと不良ちっくな乱れた制服姿とピチッと美しく早くも着こなしている長身美人の姿が。ヒロとその幼なじみの早乙女だ。

早乙女に服装を怒られたのでしぶしぶヒロは直しながら俺の元まで来た。

「よっ、秋田。またこいつの事よろしくね」

「俺によろしくしなくても結局は早乙女が世話すんじゃん」

「世話ってオレはペット扱いですか！？」

「「ペット以下」」

「ひでぇ！！」

中学からの相も変わらずなやり取りをしつつもニシコーへと確実に歩みを進める。

「あれ？三人ともお揃いで？」
もう少しで着くかという辺りでまたまた中学からの馴染みである洋介にであう、メガネが今日も似合う。あり？メガネ変えたか？
「あはは、鈴音ちゃんも相変わらずみたいだね。他はぴちっとしてるのにスカートだけ短いのはヒロにやられたんでしょ？」
「ご察しの通り、このバカ知らない内に切ってたのよね」
「オレは鈴音のミニが見たかっただけ…げふっ！」
あぁ、中学の時みたいに切られたのか。と俺は蹴られてぶっ飛び転がり回るヒロを見ながら呑気に考えていた。
「おっ、ついた」
そんなこんなで目的のニシコーについた我々はつい数日前に送られていた文書の中のクラス分けを見てとりあえず自分のクラスへ向かう。俺とヒロに洋介は同じクラスだがヒロには残念な事に早乙女は隣のクラスだった。
「鈴音は別かー…」
へこんでいるバカを置いといて俺と洋介は黒板に書かれた自分の席へ向かった、荷物をおいて座った俺はとりあえずトイレに行きたくなったのでトイレに向かった。
用を足し終わり教室に帰る途中、
「あぁ～！んな堪忍な～！ありえへんわホンマにー！」
関西弁？な変わった口調を聞いて声のした方を見るとどうやったらそうなるのかカバンの中身を廊下にぶちまけ更に筆箱の中身もぶちまけているおそらく同じ新入生だろう女の子がいた。
助けてやるかと思いとりあえず彼女の筆箱の中身を集めて上げた、ふと顔を上げると俺以外に一人だけ彼女の手伝いをしている女の子が。茶色がかった長い髪に平均くらいの身長、ちょっと凹凸に乏しい細い身体つき。
「おおきになぁ～お二人さん」
「ん、あぁ全然いいよ」
そういや関西ってありがとうの事『おおきに』って言うんだっけ、

と思いつつも俺は返事を返したが例のあの子……一緒に関西の人を手伝った彼女は無表情でコクりと一度だけ頷くとすぐに教室に入っていった、隣のクラスだった。かわいいけどちょっと無愛想だなとその背中を見送った。

彼女との再会は予期せぬことに一時間も経たないうちの事だった。

入学式の会場に向かう流れになり廊下をぞろぞろと新入生達は歩いていく、俺もその中に含まれている。

そんな時に、突然鼻から水の様なものが流れるのを感じた。ん？と思い鼻水とはまた違った感覚とすぐに香ってきたあの鉄の匂い。

(鼻血でた…)

鼻下を拭った指に付着した鮮血、笑えねぇ。

だらだら出てくる鼻血に困惑していると視界の端に突然ハンカチが見えた、かと思うと胸元辺りにずい…と押し付けられる。

「使って」

ただそれだけ言うと彼女はすぐに廊下を歩いていった、あの無表情の子だった。

ハンカチを押し付けてきた時も無表情、でも俺は見たんだ。あの無表情の下にある優しい笑み、優しい瞳。

「……あ」

運命の出会い？その時の俺は乙女チックにもそんな事を考えていた。

あの時から俺は入学式のあの子を見るたびに胸が高まった、これは恋だ。そんなのハンカチをもらった時からわかっていた話だった。

俺は自机の引き出しに入れられたあの時のハンカチを見ながら感慨深く入学式の事を思い出していた。

結局あの時使えなかったハンカチ、これは宝物として引き出しに

大事にしまってある。
「壮児？ご飯だよ？」
その声を聞いて俺はハンカチをしまい部屋を出る、全く人生とは分からないもんだなと思う。
入学式のあの子への恋は約一年ちょっと経った今も継続中だ、いつかこの片思いを発展させたいな。

弐

「壮児ルームと家政婦さん」

いつものように秋田家を掃除していた流はとある部屋を見て立ち止まった、いつもは素通りしていくのだが几帳面な流として少し見すごせない汚さを誇る壮児の部屋。
うーん、と少し悩む流。こんなに汚いと身体に悪いかもしれないし……でも人の部屋を勝手に掃除するのは……そんな感じにあれよこれよと考えている流の後ろをある人物が通りかかる。
「おや、流ちゃんどうしたんだい？…あぁ壮児の部屋か、汚な」
「あの…掃除したいんですけどさすがに怒られますかね？」
久しぶりの登場、親父さんである。
流はとりあえず聞いてみた、親父さんはいつも曖昧な笑みを浮かべる変な人なんだがこれでも一家の主だ。
「全然いいよ〜、むしろ掃除してあげて？」
余計な事を。壮児がこの場にいたら必ず言っていただろう、だが不幸な事に秋田壮児は家を空けていた。この親父の一言により決心のついた流は掃除機をひとまず廊下に置いといて散らかっている物を片付ける事から始めた。

ここで前置き、秋田壮児は今まで自分の部屋だけは掃除させない様にしていた。理由は１６歳男児ならば必ず…とまではいかなくとも八割程の奴が持っているコンビニの雑誌コーナーで端っこの方に隔離されるようなアレはもちろん、他にも見られたら恥ずかしくてたまらない物が色々とあるのだ。

「〜♪」

ご機嫌な様子でテキパキと片付ける流はベッドや床等の周辺を片付け終わり机に向かった、一般的な学習机に散乱している教科書や勉強に関係ないものをまとめて教科書は少し高い位置に収納スペースがあるので綺麗にならべておく。他のよく分からない物はまとめて置いておく、ふと何かを見つけた流。

教科書を並べた棚の下辺りにある空白のスペース、一般の人はそこに写真とかを貼ったりするのだろうそこには例に漏れず写真が貼ってあった。何を隠そう流の。

ドアの外からでは見えない位置に机はあるので今まで流が気付けるはずもない。押しピンでコルクボードをぶら下げてありそのコルクボードに流の色んなアングルの写真が七、八枚貼ってあった。

「私だ…」

こんな物を見れば普通は気付くのだろうが流は違った。いつこんなの撮ったんだろう？と可愛いくらいの鈍感さを垣間見せてくれた。

「ん、これは？」

次に流が見つけたのは両親と三人で写る幼い壮児の写真、写真立てに入ったそれを見た流はちょっと壮児に悪い気持ちになった。流は良子さんから事情を聞いているので秋田家に母親がいない理由を知っている、壮児は実際あまり気にしていないのだが流はその話題はタブーだと勝手に思い込んでいるのだ。

写真立てについた埃を払いもう一度置き直すと流は掃除を再会した、コンポが机の端と端に置かれていたのでそれの埃も払う。制服が椅子に掛けてあったのでそれをハンガーに掛けて壁に引っかけるところがあったのでそこに掛けておいた。

机も大分きれいになったなと思っているともう一つ写真立てを見つけた、それは倒れてしまっていたが埃は全然ついていない。
何の写真だろう、とひっくり返してみると。流がこの家に来た日曜日に撮った写真だった。
親父さんも含めた三人で撮った写真もあったはずだがそれには流と壮児二人で写った写真が入っていた、なんか昔に感じるな…と微笑んだ流はそれを先程の写真立ての横に置いた。
あとは掃除機かけるだけか…。

もちろんこれだけで済むわけがなかった。

「んなにぃぃ！？」
その後帰ってきた壮児は部屋に入るなり感じた違和感につい叫んでしまう、きれいになっている。
バッと机を見てピカピカになっているのを見て血の気が引いていくのが分かった。絶対みられたじゃねーかと汗を垂らす。はっ、と我に返った壮児はベッド下をまさぐった。そこにあった〇本はきれいさっぱり無くなっている。
掃除機をかけていた流はベッド下に引っ掛かる物を感じたので引っ張りだしたのだ。だがそんな事は知らない壮児はあわてて仮説を立てた。
一、流が掃除した
それしか立てれなかった。
「なっ流！俺の部屋掃除したの！？」
すぐに部屋を飛び出し隣の部屋をノックしながら叫ぶ壮児、ここで開けて着替えにばったりとか言う嬉しい展開は無い。
―ガチャ、とドアを開けて流が顔を出す。
「片付けたよ？ダメだった？」
「いえ全然」
流に弱い壮児は文句の一つを言えはしなかった。

「あと、あんないかがわしい本は捨てたから」
「うぇ？」
絶対これから自分の部屋はきれいにしとこうと胸に誓った壮児だった。

流の机に置いてある写真立てがキラリと光を反射していた、中には恥ずかしそうに立つ壮児と相変わらずな無表情の流が微妙な距離をとって立つツーショットの写真が入っていた。

参
「ある日の日常シリーズ」

壮児
「うーん今日は風強いなー」
流
「そういえば警報でてたよ」
壮児
「マジ？ケガしないようにしなきゃ…ぅわぷ！なんか飛んできた…パンツ？」
流
「…それ私の」
壮児
「ぶーーーっ！（鼻血）」
その後あわてて流は洗濯物を見に家に帰った、学校には間に合ったが壮児は午前の半分を保健室で過ごすのだった。

壮児

「流、たまにはメシ手伝うよ」
流
「じゃあ卵剥いて」
壮児
「よっしゃ」
コン……ゴン！………グシャッ！
流
「ゆで卵なんだけど」
壮児
「え？」
それぐらい気づけよ。

流
「そういえば壮児の机にいっぱい私の写真貼ってあったけどいつ撮ったの？」
壮児
「（ドキッ！）いつって言われてもなー…貰い物だから…」
流
「なんかけっこうきれいに撮れてたね」
壮児
「え？……まぁいいカメラ使ってるらしいし（着眼点そこ!?）」
お前も気づけよ。

肆
「ある日の授業風景」
数学、俺のクラスは男の教師が担当している。

少し太った中年なんだがそんなのは置いといて俺のクラスは騒がしかった。
「えーと、ここはｘが」
「シックス！？」
「六かっ！」
この様に二人組の漫才コンビが面白くもないボケとツッコミでことごとく授業を妨害したりするのだ、教師はフルシカトで授業を進めるが。あとは騒いでいるものの授業妨害をする者がいないので割と普通に授業は進む。なのでこのクラスではできる奴とできない奴の差が激しい。
「六って…数字かーぃ」
「数字だーぃ」
ドン！とツッコミがボケを押した、ボケはよろけて真面目にしている流の机にぶつかった。
秋田壮児はキレた。攻撃力三倍、守備力五倍。
立ち上がりボケに向かって歩いて思いっきり蹴飛ばした、ボケはぶっ飛んだ。
「てめえなめくさっとんなよワリャア！！」
そう怒鳴る俺にクラスメイト達は
（うおお！秋田の逆鱗に触れてしまったぁぁ！）と肝を冷やしたがそんな事が俺にわかるはずもなく…まぁわかってもどうというわけではないが。
「壮児、大丈夫だから座って」
「わかった」
（はやっ！）
もう一発ボケに蹴りを入れようとしたが流に裾を捕まれてそう言われたので席に戻った。
漫才コンビは静かになった。
「鈴音ぇ、今度の土曜日遊びに行こうぜー」

「一人で遊べ」
一方ヒロは早乙女をデートに誘うべく奮闘していた、だが早乙女の反応は冷たくヒロは捨てられた子犬の様な顔をしている。
「んな事言わずにさぁ、オレとお前の仲じゃん」
「腐れ縁だろ、好きでお前と同じ学校にいるわけじゃない」
ちなみにヒロは早乙女と同じ学校に行くために猛勉強をしたという裏話がある。
「そんなツンツンすんなよ！素直じゃないなぁ！」
「素直です｜、本心だもんね｜」
ムキになる二人、だが俺にはこの先の展開なんか手に取るようにわかる。早乙女が妥協して『わかったよわかった、行けばいいんでしょ』と結局デート…かどうかは知らんが土曜日に遊びに行く約束をするのだ。
「いいだろ！別に用事無ぃんだろ？んじゃぁシティマート行こうよ、それか家でゲームとか！」
「はぁ…もうわかったよわかった、行けばいいんでしょ」
こんな展開中学から何回も見ている。伊達に中学からあいつらを見てきているわけじゃない。

洋介は携帯を弄ってるだけで面白みがないから語らないでおこう。

―オマケ―

あの時結局ハンカチを使えず壮児は鼻血をどう処理したのか
「こらっ！何してるんだ！ってカーテンが血だらけに！」
カーテンで拭いてしこたま怒られた。

エロ本が捨てられた数日後の話

「壮児！お前まさかオレの貸してた秘蔵のアレも捨てられたのか！」

「うん、悪いな」

「てめえーっ！」

ヒロの秘蔵本まで捨てられていた事が判明した。

オムニバス家政婦さん、終

七話、オムニバス家政婦さん（後書き）

次回は流が風邪をひく話。小ネタ募集中、日常シリーズや短編として書いて欲しいネタ募集します

八話、家政婦さんは風邪をひきつつ回想する（前書き）

なんていうか……シリアスじゃねーか。な今回、ほんとはほのぼのとした事を書く予定だったのですが…つい暴走してまだ書く気のなかった流の過去話を出してしまいます、ネタバレか？とりあえずオムニバス家政婦さんでまたほのぼのした所を書きます。

八話、家政婦さんは風邪をひきつつ回想する

「スタッダッププリーッズ！」
「先生―、授業隣じゃないですかー？」
突然、バン！と教室のドアを勢いよく開けたと思うとズカズカと大股で入ってきた担任である英語担当女教師が冒頭のセリフを叫んできて生徒諸君は一同唖然。一人の生徒が手をあげながらそう言うと担任は目を丸くしたかと思うとチョークを地面に叩きつけて出ていった。
古文の堅物教師のポカーンとした顔をヒロが携帯で写メを撮っていたので後で送ってもらおうと思う。
「うぉほん！授業に戻る。とりあえず上代とは何か、早乙女くんスタンダッ…うぉっほん！」
とりあえず頭の中でお前日本語専門だろ！とツッコミを入れておいた。

「あっはっは、スタンダップだって！古文なのにっ！」
休み時間、腹を抱えて爆笑する早乙女。ヒロはチェーンメールで堅物教師の顔写真を広めている。洋介は彼女からの呼び出しで今はいない。とまぁ各々が休み時間をそんな感じで過ごしている中、俺こと秋田壮児は気が気でなかった。
その理由は俺の視線の先にいる、頬を上気させほんのりと赤く染めつつ虚ろな目は焦点が合っていない我が家の家政婦さんこと流。
ちょっと色っぽさを感じ……ゴフッ。
ふざけるのはその辺にしといて流は風邪をひいている。流自身は大丈夫だ、大丈夫と言っているが第三者的視点では明らかに大丈夫ではない。早乙女もどうやら気づいた様で流の額に手を当ててびっくりした顔をすると、一応確認といった感じに自分にもその手を当

てる。
　そして俺を蹴る。
「ぐはぁっ！」
　顎に直撃したその一撃で俺の身体は易々と宙に浮き机を倒しながら地面を転がる。くそ痛い。
「っんなにすんだよコラ！」
　当然のごとく俺は怒りをぶつけるわけだがそれを越える怒りをぶつけてくる。
「なにすんだだぁ！？んたっこんな流見てよく休ませようと考えなかったねぇ！」
「うっ！」
　そこを突かれると何も言い返せません。言い訳をさせてもらうと朝からこの調子の流を俺も休んだ方がいいと説得したのだが学校に行くと言って聞かなかったのだ。だが普通ならそこで引き下がる俺じゃないのだがあの懇願するような目を向けられてつい許可してしまった、今さらだがかなり後悔してて泣きそうである。
「お、おい鈴音」
「うっせぇ！」
　裏拳で後ろに転がるヒロ、すまん多分俺のせい。
「私が朝気づけなかったのあんたのせいじゃないの！」
　早乙女はそう言うと倒れるヒロに追い討ちをかける、そういえば朝ヒロと早乙女がケンカしていたな。
「あららぁ、ヤバい事になってるねぇ」
　いつの間にか帰ってきていた洋介がそんな事を言いつつニヤニヤしながら席に座った、おいなんとかしようとは思わんのか。
「いやはや流ちゃんの調子が悪そうとは気づいてたけ……こりゃ重症だね」
　俺達がこんなにも騒いでいるのに明後日の方向を見たまま動かない流に洋介のいつものにやけ笑いは真顔になっていた、俺も先ほどのダメージでふらつくものの流の元に行く。

「こら秋田ぁ！」
予定だったのだがドロップキックを決めてきた早乙女のせいでそれは叶わなかった、殺されるかもしれない。ちなみに周りの連中はなんだなんだと野次馬根性を見せてきている。
「あ」
誰かが言った、俺だった。流が倒れた、倒れた。おいおいおい、ヤバいって。よし洋介よく受け止めた。あれ？もしかして流そんなに重症だった？
なんで止めなかった俺。
今更後悔しても遅い。

いつだっただろうか。
「お前つまんねーよ」、そんな言葉を投げ掛けられたのは。
あぁ、小学生の頃だ。たしか六年生、仲良かった友達に言われたんだっけ？
お父さんが単身赴任でいなくなって、ちょっとへこんでた時に大した事のないすれ違いでケンカした時に言われたんだ。べつにいつもならケンカしてもすぐ仲直り出来たんだけど、その日から何か互いに話しにくくなってそのまま卒業して中学は別になってしまった。
悪いのは私だと思う、その言葉を聞いた時に自分は皆にそう思われてるのかと怖くなって学校をちょくちょく休むようになったりして向こうに無駄に罪悪感を感じさせて……多分それで仲直りの機会を無くしてしまった。
昔から……物心ついた時から私は感情を表に出す能力に乏しかった、それ自体私自身は分かっている。それをいつのまにかコンプレックスに感じていたせいで『つまらない』という言葉に過剰に反応してしまったのだ、向こうもここまで気にすると思ってなかったのかも知れないけど今でもあれは本心なんじゃないかと怖くなる。真実は今となっては分かりはしない、分かろうとしても今さら遅すぎ

る。
中学になって、母が家政婦さんの仕事をするわと言ってちょくちょく家を空ける様になったので家事を手伝い始めて大人ぶっても心は臆病者のままだった。
「春野さんって笑わないね」
いつしかそんな事を言われた、あぁ久しく笑ってないな。というより人付き合い自体が怖くなっていた、『つまらない』と思われるのが嫌だから。嫌なのにどんどん『つまらない』人間になっていった。
ようやく分かった、自分は仲が良いと思っているのに向こうは思ってない。そんな関係になるのが怖いのか。ただの傲慢じゃないか。
そう母に言われた。勉強と家事しかやることの無い私は家にこもってその二つのどちらかに励んでいた、中二の時には高校レベルの勉強をし始めていた。分からない所は中学の教師の中にとても熱心な人がいてなおかつ頭も良い先生に教えてもらいどんどんと知識を増やしていった。
「流すごいわ〜、学年トップじゃない」
そんな時期に私は嫌がらせを受けたりした、いじめになるかも知れないが私的には大して気にしていないので結局誰にも言っていない。
「ちょっと顔が良いからって調子のってんじゃないよ」
教科書の重要な所が破かれていたり、一生懸命板書したノートを汚されていたり。最初はそんな地味な事ばかりだったのだけれど何をされてもノーリアクションの私が勘に触ったのか少しずつエスカレートしていった、女子のいじめはクラスの人達をローテーションの様に標的を変えていて、ついに私の順番が来たらしい。
偶然その時が私の鬱にも似た状態が頂点だった、そのせいかどんな事をされても無表情を崩さなかった私に対してとうとう限界が来たのかある日学校内でも人気が無い校舎裏に連れていかれた。連れていかれる時にメジャーな所を選んだな、としか思っていなかった

のを覚えている。
「あんたねぇスカしてんじゃないわよ」
すっ、とカッターナイフを取りだしカチカチと伸ばしてくるいじめグループのリーダー格。
「その顔に傷をつけてもいいのよ？」
と顔に刃を当ててきた、それでも無表情だった私に腹が立ったのか刃を離して胸を強く押してきた。背中が壁にぶつかる。
「本当にむかつくわ、あんた」
そう言いながらカッターの刃を向けてくる、その時期私はとても心が荒んでいたんだと思う。
リーダー格の手にあるカッターの刃に対して素手の右手を、しかも刃の先が手のひらの真ん中辺りに刺さる様に私は突き出した。当然と言うべきか、プツリといった感触を感じさせて刃は刺さった。
無論私の右手に。
いじめグループ……四人程いたのだがその全員が息を呑んだ。痛いけど、どこか満足していた。もしかしたら自殺願望があったのかもしれない。
「あ、あ、わあああ、ごっ、ごめんなさいぃっ」
かなり混乱しているリーダー格はカッターから手を離す、私か手を下ろすと重力で案外普通にカッターは落ちた。筋肉の収縮だとか関係無かった、それほどの筋肉が無かったのかもしれない。
わぁぁ、と二人ほどが泣いて、二人は逃げた。恐怖という表情を全員浮かべていた。
結局、その事件は公にはならず。闇に葬られた……と言えばいいさか言い過ぎたが、とりあえずこれは彼女達に大きな心の傷を負わせたと思う。
次の日包帯をして学校へ行っても嫌がらせは無かったし、これからも誰かが犠牲になる事も無かった。母には包丁を落として刺してしまったと苦しい言い訳をしておいた、病院には連れていかれたが。
ただリーダー格の彼女がその日にお金が入った封筒を渡してきた、

私はそれを笑顔で返した。多分その時彼女は恐怖を感じたと思う、それは私が中学で唯一笑顔を見せた時だから。

いつの間にか受験が近づいていて、志望校を一つも決めていなかった私は母に相談した。学校の先生達は有名なエリート校を薦めるのだがいまいち行く気にならないからだ。

「そういえば秋田さん家の壮児くんはニシコーに行くらしいわよ〜、あなたもそうしたら？」

秋田家、あぁ母の勤め先か。

母の勤め先である秋田家の一人息子が私と同い年なのは随分前から母に聞かされていた、だからと言って顔も声も何もかも知らない赤の他人。そんな人がそこに行くからなんなのだ。そうは思ったが私は第一志望を西高校にしていた、私に残った唯一の繋がりだからかも知れない。細い繋がり。それと母からいつも聞かされている秋田家を知りたかったのかも知れない。

先生達がとても残念そうな顔をしたのをよく覚えている、西高校が普通の中の普通だからだろう。あなたはもっと出来るのに、と言われたが無理して勉強したくないんですとありがちな理由を述べておいた。

「あなたも第一志望ここ？私はここが第一志望なんだ、お互いに受かる様頑張ろう」

試験会場で屈託の無い笑顔で話しかけてきたのは女にしては短い髪のサバサバしてそうな美人さんだった。彼女が後に入学して同じクラスになり親友と言える関係にまで発展する鈴音なのだが、そんな事その時の私は知るよしもなく無表情を貫き通していた。

試験会場を後にして帰路につく私は珍しい事に遭遇した。

気の弱そうな人が不良に絡まれている、今でもこうゆう人っているんだな。と再認識させられる。周りの人は当たり前のごとく見て見ぬふり。

かと言って女である私が助けにいった所でなんの解決にもならない…か。

「おいこらお前らっ！群れねぇとカツアゲ一つできねぇのか！」
そんな事を思いながら彼らを見ているると通行人の一人がそう言いながらズカズカと近づいていく、１７０中盤くらいの背に髪は額が隠れるくらいで、もみあげは顎に届くか届かないくらいで後ろは短い。どうやら制服を来ているらしい彼は不良達の前で静止する。なんかこの髪型見たことあるな？と思ったのも束の間、不良達は不服そうな顔をしながら去っていく。自慢気な顔をしながら二人の友人と彼は去っていく、残されたカツアゲ少年に大丈夫？と話しかけたがすぐにどっかに走り去ってしまった。

その少年との再会は偶然だった、正直その時には全く覚えていなかったのだが。
関西訛りの子の落とした物を拾う手伝いをしていた時だ、そしてその後鼻血出してあわあわしていたのでクスッと笑いが込み上げてきた。可哀想になったのでハンカチを半ば押し付ける形で渡した、その時に久しぶりに笑った事と不良から少年を助けていた彼を思い出した事とで色々と頭が一杯になった。更にその彼が秋田家の壮児だなんて事を知るのはもっと後だ。
「私の幼なじみうるさいんだよね〜ほら、あれあそこにいるやつ。クラス別になって助かったよ」
鈴音と仲良くなって、よく休み時間とかに二人で話をする様になった……鈴音がほとんど喋って私が答えるだけだったけど、それでも私にしては嬉しかったし仲良くなるよう頑張ったつもりだ。そんなある日二人で話ながら歩いていると彼女が幼なじみを見つけた、その隣にいる彼に興味を持った。
何度も幼なじみの話は聞いていたので気にはなったがそれ以上にその隣にいる彼に興味を持った。
「あぁあいつはね、結構なお人好しで、名前は秋田壮児ってんだよね。女が苦手な面白い奴でさぁ、多分手も繋いだ事ないんだよクク。んでもう一人が腹黒な……」
なんていう偶然だろう、何度か偶然に関わってきた彼があの秋田

壮児なのだ。
あれが秋田くんか、またいつか話せるかな。そんな事を思いつつも結局二年になっても結局変わらなかった。
でもつい最近になって劇的に変わった、秋田家で働く様になって壮児との関係はもちろん表情が少し豊かになったと鈴音に言われる様になった。
学校も楽しくなった、ヒロくんに洋介くんとも喋る機会が出来た。真由理さんとは未だに喋った事がないけれど少し変わった口調の人らしいと洋介くんに教えてもらった。
風邪をひいてでも無理に学校に行ったのはカッコ悪い所を見せたくなかったからだ、私には変に負けず嫌いな所があるので多分それだ。
とりあえず今は何時だろうか。私はまだぼんやりとするものの目を開けた。

「あ、起きた？流大丈夫？」
消毒液の匂いが鼻腔をかすめたので多分保健室だろう、病院にまでは行ってないと思いたい。
すぐよこに鈴音の姿があった、先の声は鈴音だったらしい。キョロキョロと辺りを見渡すとどうやら予想通り保健室らしい。
「ん、大丈夫」
私はそれだけ言うと上半身を起こす、少し頭が重いし血が上っているような感覚があるが。
「どこが大丈夫なのよ、寝てなさい」
だが鈴音によりまた寝かされてしまった、そんなにひどいのだろうか。
「もぉ大変だったんだから、まぁ私のせいもあるけど…」
恥ずかしそうに頭をかきながら鈴音は言う、私はうん、と頷くと鈴音は話し始めた。
「秋田の奴が騒いで騒いでしょうがないったら、挙げ句に泣きなが

ら自分責めるし。まぁちょっと強く当たり過ぎちゃったし…」
気まずそうに鈴音がそう言っていると保健室のドアが開いて壮児が入ってきた……かと思うと泣き腫らして赤い目を輝かせてこちらに勢いよく近づいてベッドの前で膝をつく。
「な、流！大丈夫か？ごめん、俺が止めなかったから」
あわあわと話す彼を見ているとまたクスッと笑いが込み上げてきた。私は目の前に置かれた壮児の手をぎゅっと握る。
「私こそ、無理言って心配かけて……ごめんなさい」
と、精一杯の誠意を込めて謝った。あれ？壮児の顔が赤くなってる、風邪移したかな？
「壮児風邪移った？」
慌てて言う私に鈴音はため息を吐いていた。

八話、家政婦さんは風邪をひきつつ回想する（後書き）

次回は流のいとこが秋田家に来ます、ガキと同級。そしてついに壮児に恋のライバルが……！？

九話、家政婦さんの従兄弟と三連休（前書き）

前回のシリアスはどっかに消えちまいまして。最後の方は無理矢理終わらした感ありますが…とりあえず置いときまして。本編お楽しみください。

九話、家政婦さんの従兄弟と三連休

『三連休』
その言葉にクラスは沸き立っていた、頭にその言葉だけを浮かべて今にも動かしたくなる足を抑える。
「んじゃー今日はここまで…」
『ありがとーっございやしたー！』　教師が授業の終わりを告げ切る前にほとんどの生徒が立ち上がり普段より数倍やかましく叫ぶとバタバタと騒がしく帰っていった。
俺こと秋田壮児はそれをぼーっと見ているだけである、だが明日から三連休と思うと今にも踊り出しそうなくらい嬉しくなる。ヒロなんてついには踊り出した。
まぁ早乙女の蹴りによって中断せざるをえないのは言うまでもないか。
「壮児」
ん？と振り返ると流が帰りの用意を終わらせて俺の近くまでゆっくりと歩いてきた、さっき慌ただしく帰った連中にもこれを見習ってもらいたい。
ちなみに洋介は慌ただしく帰った連中の後ろマイペースに歩いて行った、今日も多分彼女の部活が終わるまで待つのだろう。
「三連休なんかやること決めたー？」
「えー？決めてなーい」
帰らずに机に座り雑談する女子のそんな会話を聞いて俺はどうしようか？と考える。
流はどうするのだろうか？と思ったがどうせ同じ家にいるんだしなんとでもなるかと思い直しさっさと帰る事にした。
「あり？ヒロと早乙女は？」
あいつらはどうするのかな？と教室を見渡すと二人の姿が見当た

らない、いつもならまだケンカしてるだろうのに。
「さっきヒロくんが鈴音を強引に連れて帰ってたよ」
「…まぁそのうち主導権変わるだろうけど」
相変わらずの無表情でドアの方を見ながら答えた流に俺は立ち上がりながらそう返す、よし帰るとしますか。

「こんにちはー！流お姉ちゃんいるー？」
土曜日、朝。俺はその突然の事に驚きを隠せなかった。
朝早くからインターホンを鳴らされたので流に起こされて朝食を食べていた俺がドアを開けると小学生くらいのガキがいるかと思うと突然そんな事を言い出したのだ。え？なに？誰？
「こら大紀（たいき）！お前…っ礼儀ってもんがあるだろうが！」
ゴチン！とそのガキの頭に拳骨が落とされる、横を見ると浅黒の肌をした男が立っている。背はオレの１７６を優に越して多分１８０はあるだろう、多分年齢はさほど変わらないと思うがやけにつり上がった目が怖い。つか目付き悪いよ。
「いった〜…でも住所も名前も合ってるし…って流お姉ちゃん！ほらお兄ちゃん！流お姉ちゃんだほー！？」
だほ？方言か？
くるりと後ろを見ると様子を伺うとしたらしい流がすたすたと歩いてきている、若干怒りを感じるのは気のせいか？
流を見て１８０男がパッと目を輝かせたのを俺は何気に見逃さない。
「流っ！」
「朝早くから近所迷惑でしょ？静かにできないの？大地（だいち）、大紀」
俺の横に来た流は嬉しそうに流を呼ぶ男をシカトして冷たくそう言い放つ、あぁ怒ってる理由それ？つか知り合いですか？
「悪いな、流。ところで」
１８０男は一旦そこで言葉を切ると俺をジロリと睨む。

「何？こいつ」
敵意丸出しの180男、右手に握っている紙切れをぐしゃっと潰している。
「お兄ちゃん！この家の場所分からなくなっちゃうよ！」とガキが一生懸命180男から紙切れを抜き出そうとしているので多分この紙切れを見てウチにたどり着いたのだろう。それにしてもこいつら流とどんな関係だ？
「流、こいつら知り合い？」
「うん、従兄弟」

従兄弟…か――
「従兄弟っ！？、マジでか！」
「なんでそんなに驚くのかは知らねぇが、お前こそ何なんだよ。流の何？」
「あれ？お客さん来てるの？」
俺と従兄弟くんが指を差し合いながらちょっと険悪になり始めた途端後ろから間抜けな声がした、生まれた時から何度も聞いてるクソ親父だ。
「あぁ、もしかしたら陸川くん達かい？良子さんから遊びに来るとは聞いているよ」
「じゃあ俺にも言えよ！」
親子喧嘩はほどほどにしてリビングに上がってもらう事になった。

「この二人は私の従兄弟で、でかい方が陸川大地（りくかわだいち）小さい方が大紀（たいき）」
「よろしくねぇ！壮児兄ぃ！」
ちびっこ、大紀が人懐っこい笑顔で明るくやかましく言ってきたのに対し、でかい方は敵意丸出しの目をこちらに向けている。
「あー、俺は秋田壮児」
とりあえず苦笑いで挨拶をしておく、ふとでかいの…大地が流に視線を変えて口を開く。

「良子さんから聞いたけど、こんな男と一緒に暮らしてんだろ？なんでまた家政婦なんか」
「大地には関係ないでしょ」
ピシャッと言われて大地は何も言い返せなくなったらしい、不満そうにしつつも口をつぐんだ。
「あ、壮児。私鈴音と約束あるから悪いけどこの二人お願い」
今思い出した様に突然立ち上がりそう言って玄関に行く流、だから朝早くから出かける準備してたのか！俺も行きてぇっつーの！じゃなくて
「待て！流……って行ったし」
この状況をどうしろと。
「とりあえず、大地だったっけ。一つ聞くけど」
よいしょ、と座り直す。前にいる大地と視線を合わせる。ドドドドドな感じの空気がリビングを流れた、ちなみに大紀は我が家の探検に張り切っている。
「お前ってさ…」
空気は更に張り詰めた……かもしれない。
「流の事好きなの？」
「ごふっ！」
流が一応と言って出していたお茶を啜っていた彼は面白いくらい吹き出した、クールな野郎だったが今は半端なく動揺している。
「げほっげほっ、き、気管にっ…てめっ深刻な空気にしといてなんだそれは」
「なんか言い出しずらいじゃん、つかやっぱ好きなんだ」
「う、うるせー！てめえも惚れてんだろあいつに！」
「ぅえっ…なんで分かったぁ！」
「なんとなく分かるわっ！分かんねぇのは流くらいだよ」
しばし沈黙。
「まぁ…そんな鈍感なとこもいいんだが」

顔を赤くしながら言う大地に俺もうんうんと頷きながら共感する。
「あそこまで鈍感だとむしろチャームポイントだよな～」
「まぁそれは言える」
ニヤニヤとしながら流の事について語り合う俺達は端から見れば近寄り難かったのかリビングに入ろうとして静かに回れ右をした大紀の姿があったのはまた別の話だ。
「ところでなんでまたいきなり遊びになんて？」
話題転換。先程から気になっていた事を単刀直入に聞いてみた、ウチの住所を調べてあったくらいだから単なる思い付きってわけでもなさそうだ。つか紙切れに住所書いてあったみたいだが誰が教えたんだ——良子さんか？
そういや親子が良子さんから従兄弟連中が来るって聞いてたって言ってたな……。
「突然良子さんからオレ宛に長文の手紙が送られて来てな、そこに住所が書かれてたんだ。手紙の内容が内容でな——」
「ほぅほぅ」
「流が家政婦!？同級生がいる家に!？それって同棲じゃねーかーッ!!」
突然立ち上がり火を噴く勢いで怒鳴り出す大地、そうか、謎は解けた。——良子さん、あなた面白がってるだろ？
「まぁというわけだ、良子さんの見舞いも兼ねてこの三連休にはるばる来たわけだ」
落ち着いたのか座り込む大地、そういや最近良子さんの見舞い行ってないな。
「そういや俺も久しく見舞いに行ってないから今から行くか」
「は？今から行くのか？」
突然そんな事を言い出した俺に驚きを隠せないのかきょとんとした顔をする大地。
「まぁそうだな。流がいないんなら特にここに居る意味ないからな」
少々棘がある物言いだが初対面の奴と二人っきりにされてぶっち

ゃけ困ってるので良い気分転換になるとは思う、俺達は何故かリビングを様子見る大紀を連れて良子さんの見舞いに行く事にした。
「よぉ壮児！遊ぼうぜ！」
良子さんの見舞いはまた今度になる。
理由は玄関のドアを開くと何故か目の前で満面の笑みを浮かべるヒロが大きく関係していた。

「いやいや何、別にオレは諸君に喜んでもらいたかっただけさ」
所変わってシティマート。わいわいと賑やかで晴れやかな周りの人々を他所に、我々……というより一人の人間は異様な空気を放っていた。
「いやー、大地くん…だったか？君まで流ちゃんを好いているとは驚きだよ、まぁそれは置いといて」
パントマイムをしつつヒロは周りを気にする事なく喋り続ける、俺と大地に大紀は呆然としている。
「ストーキング？ノンノン、そんな邪道なものでは決してない。オレの交渉術で鈴音から遊び先を聞き出したのも流ちゃんと二人で遊ぶという情報をひねり出したのも許される行為さ」
ゴゴゴゴゴという効果音がヒロを除いた俺達には聞こえた気がした。
「おい壮児」
コソッと小声で囁く大地に俺は何？と聞き返す。
「あの変人はお前の友人か？」
「不本意ながら」
大地の問いに即答した俺はまだ目の前でべらべらと喋るバカを見る、大紀はやんややんやと持て囃しているが今すぐ道を逸れる前にやめなさい。
「ってわけで、彼女達が何故二人で買い物に来たのかを知る権利がオレ達にはあるわけだよ」
ついてきた俺達も俺達だがなんでそんな犯罪まがいのためにコイ

ツは土曜を潰せるのだろうか。
「んじゃあさっさと見つけますか…っと居た！発見！」
わーっと追いかけるヒロ、大地が隣の女も美人だなと言っているのを耳にしつつも溜め息を吐いてついていく。
「待て、デジャブを感じるぞ」
「何がだね」
大地とヒロが二人を視姦するのを見て俺はこの前もこんなのあったぞと思う。何故ならば今二人がいる店は所謂ランジェリーショップなるものだからだ、啓明なる読者諸君には覚えがあるだろうこの展開。
「そ、壮児。流が下着を手に…」
ゴクリと息を飲む大地に俺はスパン！と小気味の良いツッコミを入れ大紀と一緒にこの場を離れさせようと手を引っ張る、しかし弾かれた。お前もバカなのか？
「はっはっは、大地いいぞ。それでこそ男――」
ポンとヒロの肩に置かれた手、ん？とヒロが振り返るとそこにはポリスメン。
「……HAHAHA、そろそろランジェリーショップの入り口に置いてある樹を見るのをやめて帰ろうか」
「うん、キミ。ちょっと警備員室まで来てくれるか」
ヒロは俺達の下から去った、青い人と共に。
「……」
「もう帰ろうか」
その言葉に大地はうんともすんとも言わず頷いた。大紀は未だにポカーンとしているので手を引っ張り連れてく事にした。
「何してるの？」
ピタ、と俺達は足を止める。後ろを見ると無表情の流。
「あ～多分ヒロが連れてきたんじゃない？あいつさっき警備員に連れてかれたし」
早乙女お前気づいてたの！？

「今から帰る所だよ〜」
「うわっ！かわいいっ！従兄弟ってこの子！？」
にこやかに言った大紀を早乙女はギューと抱き締めた、バタバタと手足が暴れているのを見ると結構な力が入っているらしい。ヒロが見たらキレるな。
「ふーん、じゃあ私も帰ろうかな」
「えっ？帰るの？じゃあ遊びに行っていい？」
「壮児、いいかな？」
「別にいいけど、こいつらは？」
「この子がいるからいいのよ！」
「なんで俺キレられてんの！？」

「オレは蚊帳の外？」
大地の声は虚しくとも周りの喧騒に掻き消されたとさ。

「んじゃあまたな、大地、大紀」
月曜日、三連休の最後の日に従兄弟達は帰るので俺達は玄関まで見送っていた。
「またきていいからね」
親父のセリフはカットしても良いが一応。
「ありがとうございましたー！」
元気一杯大紀は早乙女に少し恐怖感を覚えたみたいだがこの三連休楽しかったと嬉しそうに言ってきた時は俺も抱きつきたくなったものだ。そして
「壮児、オレは負けねーからな」
「こっちのセリフだっての」
大地は相変わらず悪い目付きでそう言ってくる、だがなんだかんだでメアドは交換した。
「なんか勝負してるの？」

そう言ってきた流に俺達は苦笑いしか返せなかったという。

そんな感じに俺達は三連休を過ごしたとさ、めでた――そういえばヒロはあの後俺ん家に来た。青い人との話は三時間にも及んだらしいが。

九話、家政婦さんの従兄弟と三連休（後書き）

次回は突然体育祭が始まります、校長の気まぐれで

十話、家政婦さんと天然少女と体育祭・前編（前書き）

またまた前後編、新たな登場人物をまた出してしまいます。

十話、家政婦さんと天然少女と体育祭・前編

六月も半ばの暑くなってきた時期、雲一つない青い空に憎たらしい程その身を輝かせて浮かぶ太陽の下――

西高校ことニシコーでは体育祭なるものが開催されていた。

「えぇ～本日は誠に喜ばしい事に晴天に恵まれこのように清々しくも体育祭を開催する事が出来ました」

台に乗った校長は厳格な雰囲気を出してそう言っているが生徒はもちろん先生誰もが共感できなかった、そもそもニシコーの体育祭は例年ならば九月くらいに予定されているものをあのバカ校長が気まぐれにこんな暑い時期に変えやがったのだ。しかも教えられたのは三日前である、準備に追われたその日々は卒業時に必ず思い出すだろう。

一見は冷血漢というか堅そうな雰囲気を出す校長だが、こんな前フリをするのだから裏が無いわけが無かった。

「――であるからして、この……む？すまないな、甥からの電話だ」

突然そう言い出すとポケットをまさぐり携帯を取り出す、生徒や先生達は呆れ顔だ。

「――どうしたのかなぁヨシくんっ♪おじさん今熱弁中だおー♪え？あぁ。あれなら……」

一転、ギャルが乗り移ったかの様にキラキラしだす校長は電話をしながら台を下りていった。ちなみに俺が入学した時にも先程と同じ様な展開で挨拶を終わっていったので新入生全員が口を開けてポカーンとしたものだ。

「えー、バカが締めずにどっか行きやがったのであたしが締めるぞー。YES　WE　CAN！」

シーンと静まりかえった空気の中無言で台に登った我らが英語担当兼担任がそう言って体育祭は始まった、最後の言葉に深い意味は

無いと思われる。

さーやるかー、とやる気を感じさせない生徒達が多数いる中ある男はやる気まんまんでうざかった。

「おっしゃあああっ！優勝すんぜーっ！なっ壮児！」

悪いが知り合いと思われたくないんで、今更遅いか。

「つかなんでまたいきなり体育祭なのよめんどくさいわね～」

早乙女がぶちぶちと愚痴を言うのを聞きながら俺、流、ヒロ、洋介は後ろを付いていく。初っぱなから二年全員リレーがあるので招集場所に向かっているのだ。

ヒロ以外にもいる数人のやる気まんまん野郎共を見ていると、なんでそんなに真剣になれんの？と言いたくなる。俺達のクラスはともかくとして他のクラスでは行方不明者がぞろぞろとでている、バレると体育の成績が大変な事になります。

「あれ？洋介は？」

知らぬ間に眼鏡野郎は消えていた、足りない人数分他の奴が頑張らないといけないのだが何故初っぱなの全員リレーからサボるんだあいつは。

始まるまで喋っているとなんだかんだでリレーは始まった、いなくなった奴らの分はヒロが走るらしい。

一番目の走者は俺達のクラスが五位と遅れをとった。

ちなみに今更だが俺とか流達のクラスは二年に七クラスあるうち七組である。

体育祭を皆楽しもうと考えたのかワーッ！と声援が出始めた、一部の男子は女子にかっこいい所を見せようとやる気を出したみたいだ。

「鈴音頑張れよーっ！」

奇数走者の俺とヒロの逆側——偶数走者側にいる早乙女に向かい俺の隣でブンブンと手を振るヒロ。

「早乙女せんぱーい！」
「すっずっねーっ！」
「鈴音ちゃん頑張ってねーっ！」
上から一年二年三年とモテモテ男子顔負けなくらいよりどりみどりな女子に声援を受ける早乙女は二番手。現在五位の我がクラスを何位まで上げてくれるだろうか。
今バトンが渡された――と思うと短い髪をはためかせて綺麗に軽快に駆ける彼女に勝てる奴はいなかった、ぐんぐんとスピードを上げて前の四人を着実に抜いていく。あまり運動において有名な奴がいなかったとは言え男子女子関係なく抜き去っていく姿には誰もが見惚れたのではないだろうか。
そして一位のバトンを第三走者に渡した所で、今までで一番大きな声援がグラウンドを揺るがした。
運動ではヒロに劣るとは言え自信のある俺だが早乙女はそんな俺の長所とほぼ同じくらい運動が出来たりする。ただもう一度言おう、ヒロには劣るのだ。
「おらららーっ！」
無駄に雄叫びを上げるヒロ、俺の前に座っていたヒロがバトンを渡されて走るのを見つつ俺は配置につく。陸上部顔負けのスピードで走るヒロだが彼に対する声援の中には女子のものはほとんど含まれていなかった。
なんだかんだで俺に回ってきて前の走者が三位まで落ちてしまったのでそれを一位にしてやった、先を行っていた勉強学年一位のスカシ君とはいい勝負だったな。
そんな感じなんとかリレーで一位を勝ち取った我ら七組、ちなみに流は運動においては普通よりちょっと出来るくらい。洋介は逃げた事から想像つくかもしれないが運動は全然出来ない。
「よっしゃああーっ！この調子で優勝だー！」
曲者揃いの七組は皆順応するのが早く、体育祭をそれなりに楽し

んでいる様だ。人数が数人少ないがそれは気にしない。
「つか洋介とかどこ行ってんだよ」
プンプンと怒りながらヒロは弁当片手に保健室に向かいやがるので俺と流、早乙女は同じく弁当片手に付いていく。
「あっ♪だからねー♪それはぁ――」
保健室には保健の女先生でもなく洋介でもなく、バカ校長が電話をしていたのでヒロは静かにドアを閉めた。
「…嫌なもん見た」
同感だ、と俺に早乙女はうんうんと頷いていた。流はいつものポーカーフェイス。
「屋上じゃない？真由理っていつも屋上行くから」
んじゃ行くかーとヒロが言うので付いていこうとしたが
「壮児、料理部で体育祭で優勝したクラスの為に何か作るらしいから私行ってくるね」
「ぅえ？分かった――ってあいつら置いてきやがった！」
流と喋っている間に俺を置いていったヒロと早乙女、他にご飯を一緒に食べるくらいの仲の奴らは皆どっか行ってるので俺は一人になった。悲しい事だが。
流に付いていこうかと思ったが付いていった所で気まずいだけだろうのでふらふらと辺りをうろつく事にした。
歩きながら弁当を食い終わり（至難の技）、そのままフラフラとしていると。
「壮児さん」
校門辺りで俺に話しかける声が。この何度か聞いた事のある声は――と振り向くと、日に当たると若干赤みがかる茶髪の小柄な女の子がいた。ちなみに地毛だ。
「き、奇遇ですね。どうして一人で歩いているんですか？」
１５０あるかないか危うい身長に幼児体型の細身の身体に不釣り合いな数のスーパーの袋を持っている、笑顔の彼女だが手を震えて

いるのを見て慌てて俺は彼女の荷物を奪い取る様に持った。
「紅葉ちゃん、なんでまたこんなに？」
あわあわとしながら俺から袋を取り返そうとする紅葉ちゃんに俺はそう言った、きょとんとした顔をぱっと上げて紅葉ちゃんは上目遣いで口を開く。
「あ、えと。料理部の買い出しですっ、え？弁当箱？」
あわあわとニコニコしながら紅葉ちゃんは喋りだす、そんな彼女にスーパーの袋の代わりに弁当箱を持たせる。さすがに持ちづらかったからだ。
「なんで紅葉ちゃんに全部買い出し行かせたんだよ料理部は…」
と俺が漏らすと、更にあわあわしながら。
「ち、ち、違うんですよっ！わたしが自分から言ったんですよ、無理言ったのはわたしですっ」
一生懸命に説明する彼女に、全くこの子は…と内心ため息をついて調理室に向かい歩きだす。
「あ、あ、だ、ダメですよっ壮児さんにもたせるなんてっ」
進む俺に回り込んでぐいぐいと俺を押しながら上目遣いで言ってくる、しかし彼女の非力な腕では俺を止めれるはずがなかったのでズルズルと彼女は後ろに滑っていく。上目遣いに一瞬怯んだがそれは仕方ないと思う、幼ない容姿だが彼女の顔は可愛い部類に入るのだ。上目遣いとか所々に可愛い仕草がある所が男子にも人気らしい、一年生の彼女は一年五大美少女の中にも入っている。彼女は知らないらしいが。
実の所、学年別に五大美少女がいるわけだが（この学校には美女美少女が多いという謎の都市伝説）それは誰かが知らぬ間にランキング化し男子にだけ流しているのだ、七不思議の一つである。それは置いといて、このランキングは男子しか知らない（例外はあるが）ので五大美少女に選ばれた人自身は案外知らなかったりする。
「壮児さん止まって―…」
話は戻るが、この娘は『かなり』天然だ。妬む女子がほとんどい

ないくらいの。
　むしろ妬むより可愛いという感情が出るらしく男女問わず人気な所は早乙女にも似ている。流についてては嫌われてるわけでもなく好かれてるわけでも……といった感じだ、何故皆は彼女の魅力が分からないのだろうか。
　そんな思考をしつつも、もはや諦めて横を歩く彼女を横目に見る。軽めのショートボブを揺らしながらどこか危なっかしい印象を受ける。俺が彼女を見ていると彼女もこちらを見てきた、目が合うと頬を赤くしてまたあわあわと慌ててだす。

　まだ彼女との関係を話していなかったが、彼女は俺の義妹に当たる……と思う。とりあえず紅葉ちゃんは親父が別れた俺の母親が再婚した相手の連れ子だ。
　名を門脇（かどわき）　紅葉（もみじ）と言い、初めて彼女と会ったのは母親が再婚した中二の時だ、まだ彼女も中一で本当に小さかった。今でも大きくなった方だ。
　彼女がニシコーに入学したのは聞いていたが今日の今日まで会う事は無かった、なので彼女を見た時軽く驚いたものだ。しかも流と同じ料理部ときた。

「あの…壮児さんって弁当作ってるんですか？」
　突然話しかけてきたかと思うといつもより抑揚の無い声色だった。
「作って無いけど？」
　そう言うと紅葉ちゃんはらしくない歯を噛み締めるような顔をする。なんだ？
「え、これ、他の人の弁当箱ですか？」
　さっきから何を言ってるんだろうかこの子は。
「いや俺のだけど…？」
　そうですか…と、顔を伏せる紅葉ちゃん。調理室が近づいてきた所で、前から流が歩いてきた。

「流、なにしてんの？」
「壮児？こっちのセリフなんだけど」
チラ、と紅葉ちゃんの方を見た流はその後に俺の両手にある袋に視線を移す。
「これ手伝いにきたんだけど……必要なかったみたい」
「あぁ、紅葉ちゃん迎えに来たんだ？」
コク、と頷いて俺の右手からスーパーの袋を持とうとする流
「いや、大丈夫だから」
「ん」
そんなやり取りをしつつ調理室を前にした時に先程から喋らなくなっていた紅葉ちゃんを見ると
かなり不機嫌そうな顔をした彼女が後ろにいた、こんな顔は初めて見る。
俺何かした？

十話、家政婦さんと天然少女と体育祭・前編（後書き）

次回はこの続き

十一話、家政婦さんと天然少女と体育祭・後編（前書き）

週末更新から遅れ、週明け更新に。とりあえず今までトップレベルに文字数多いです。暴走しました。

十一話、家政婦さんと天然少女と体育祭・後編

「何作るの？」
「ん…オムライスらしいよ」
「…なんでまたオムライス？」
そんな会話をしながら二人は仲良さげに……流先輩が男の人と喋っているのは初めて見ました、でも何で壮児さんなんですか。
「も、紅葉っ！火柱がっ！」
え？と、二人に向けていた視線を前のフライパンに戻せばフランベでもしたかの様な火柱が。
「やーーーっ！」
と叫ぶわたし、周りも騒然としている、フライパンが離せない。
何故！？
「うわ！やべぇ！」
情けない声を出しながらも水を思いっきりかけて鎮火させた壮児さん、曖昧な笑みを浮かべる癖は父親似だと義母が言っていたのを思い出す。隣にわたしはいない。

「なんかこっちが悪い事した気分になるわ」
正座しながらウルウルする紅葉ちゃんに先程まで彼女に説教をしていた部長さんがそうこぼした、周りの部員の人達も
「もういいじゃないですか部員〜」
「許してあげましょーよ」などなど、部長さんを宥め始めている。
「流、紅葉ちゃんっていつもこんな危なっかしいの？」
先程のフランベ（仮）に目を丸くしていた流も今はいつも通り、俺がそう聞くと流は一瞬思い出すような仕草をして。
「さすがにあそこまでは見たことないかな……あんまり部活来てないからなんとも…」

ふーん、と俺は相づちを打ってもう一度紅葉ちゃんの方に視線を向けた。すると向こうもチラリとこちらを見てきたので視線がぶつかる。

目が合ったかと思えば、ふいっと効果音が付きそうなくらい露骨に顔を逸らされた、やっぱり俺なにかしたのか？

「壮児、そういえばまだ紅葉との関係を聞いてないんだけど」

目を逸らされてショックを受けていた俺はそんな流の言葉に意識を取り戻す。そういえば流に教える様に言われたんだった。

「あぁ、紅葉ちゃんはさ……」

と、紅葉ちゃんとの関係を一から簡単に教えた。そうこうしている内に説教は終わっている。

「流ー？次あなたが出る種目じゃない？」

部長さんが突然に卵を割りながら言ってくる、そういえばだが俺も出る種目の時間が近づいていた。

ニシコーの体育祭では、全学年……一年や二年とか関係無く、全校から一クラスだけ優勝を決める。

当然だが平等性なんかあるわけなく、教員達や生徒会連中とかよくは分からんがその辺が

「このクラスのコイツはすごいから十点追加」とか

「団結力が美しい、十五点」とか他にも意味不明な理由で追加点など色々と集計して決めるのだ。　まぁそんな設定は置いとくとして、俺が出る競技としては最後の――二年全員参加の『二年二人三脚リレー』がすでに始まっていた、俺と流は遅れているがスタスタと余裕の表情ですでに走っている二年の集団に向かう。部長さん、もっと早く言ってくださいよ。

「っあ！遅い！何してたのよ、二人共ここよ」

皆が一生懸命走るトラックを横切り七組の所に向かっていると、早乙女が怒りをあらわにしながら早くまくし上げる。意味もよく分かってないまま俺達は紐を渡されたので、俺は流の足と俺の足を―

―って

「早乙女っ！俺はヒロとじゃねーのか！？」

「壮児！むさ苦しい男同士で足を結び合うより女の子と結んだ方が良いだろ！！」

俺が叫ぶと同時に早乙女と足を結んですでにスタートラインでタスキをまつヒロにキレられる、しかしウィンクをしているのを見て俺は理解した。

（へへっ、なんとか流ちゃんと組んでた鈴音を言いくるめたんだぜ？オレは鈴音と、お前は流ちゃんと組めて互いに損はねぇべ？）

（――！！よくやったマイフレンド！早乙女が若干嫌そうな顔をしているけど、とりあえずよくやった！）

（（じゃあ互いにグッドラック！））

ズビシ！と親指を立て合う俺達に流と早乙女は変なものを見る様な視線を向けてくるがそこはスルー。

さっき目があった瞬間にアイコンタクトで意志疎通が出来たのは気のせいではないはず、ヒロと俺はこんな所で無駄にすごい力を発揮した。ちなみにアイコンタクトの会話を後日互いに確認しあうと微妙に違っていたという。　そんなこんなでヒロと早乙女は走り出す、運動能力が二人共に良いのに加えて怖いくらいの息のピッタリさで生まれるスピードは二人三脚しているとは思えない程で、おそらく校内一位レベルに速い。

「ぅえっ！？あいつらそのまま一周？」

普通ならば半周でタスキを次の走者に渡すのだが人数合わせをうまく使ったのか二人はすごいスピードのままぐんぐんと近づいてくる、ちなみに次の走者は俺達で、しかもアンカーである。

「壮児ぃ！」

「流っ！」
二人はタスキを走り去り際に俺達に渡していく、二人は少し進んだ所で横にずれた。と、そこでまたいらん事をしたのかヒロがぼこぼこに足蹴にされている。その光景を羨ましそうに見ている女子男子達の将来が心配です。
まぁそんな事を言っている間にも俺達は進んでいて、さっきの二人が作った差もありずいぶんと余裕だった。息もそれなりに合って、こける事もなく。
「ちょっ、壮児っ、速」
「あ、ごめん」
なんと言っても、この接近具合。
夏も近づいていて、この天気の下であれば薄着になるのも必至。さりげなく俺の手は流の細い肩に回っていて、流の腕は俺の腰に回っていたり、サラサラの長い髪がふわりとはね上がって鼻を良い臭いが掠めていく。当然、俺の半身には流の身体が密着していて、そこだけが異様に蒸れて暑い。俺の胸より少し下で上下に微かに動くやぁらかいモノは――いかんいかん煩悩は捨てよ。
「よっしゃあああ！壮児いけー！」
そんなヒロの怒声を背に俺達はゴールテープを切った、少し……いやかなり名残惜しいが足の紐を取るか――。

と、俺が屈んだ時に、流は歩き出していた。ピン、と紐に足を取られバランスを崩した流は咄嗟にバランスを取ろうと体制を変える、一方で片足を引かれ尻餅をついた俺は顔に影が差すのを感じて上を向く。

「あ」

それは誰が言った一言か、俺か？それとも流？てか周り？

流の慌てた顔がドアップで写ると――――ゴン。額と額がぶつかる音。流がいたたーと額を擦りながら仰向けに倒れる俺の腹辺りに馬乗りになっている。
周りが騒がしく『大丈夫かー？』とヒロの声がするが、多分俺は今呆けた顔をしていると思う。
流の顔を見た、ちょっと頬が赤い。目が合うと目を見開き、表情に緊張が見てとれた。

とりあえずその後を言うと、鼻血を出して俺は気絶した。

「あ、起きましたか？」
目を開けると、白を基調とした部屋を背景に満面の笑顔を浮かべた紅葉ちゃん。
「あり？体育祭は…」
「あ、安静にしといた方がいいですよっ、熱中症かもしれませんしっ」
起き上がろうとしたのを両手で制されて仕方なくもう一度寝転ぶ俺、この消毒液の匂いは保健室か。
「今はですね、終会式をしています。優勝のクラスにはオムライスがもれなくプレゼントです」
嬉しそうに指を立てながら説明する紅葉ちゃん、どうやら機嫌は直っているらしい。
それにしても優勝商品がオムライスって……いいのか？それで。
「あれ？紅葉ちゃんは閉会式に出なくていいの？」
俺がふと思ったのでそんな事を聞いてみた。すると言葉に困ったのか、あー、とか…えーと、しか話さなくなった。
「え、なに？どうし――」
「あ♪でねー♪マジうけるんだけどぉ♪」
ピシッ！と空気に亀裂が入った気がした、あんた終会式はどうし

たよ、校長。紅葉ちゃんもポカーンとした顔で入り口を見ている、ちなみについ先ほどキャピキャピしながら校長は入ってきた。
「また……喋っている時に電話きたんですかね？」
「…多分そんなんじゃね」
気の無い問いに気の無い返事をしたら俺と紅葉ちゃんとの間に沈黙が流れた、校長の声が保健室のＢＧＭになっている。ぶっちゃけうるせー。つかなんでこの人校長になれたんだよ、あとクビになんないのか？
とりあえずさっさとおき上がりたいのだが、紅葉ちゃんが首辺りを押さえているので困っている。
「あのさ……多分もう大丈夫なんだけど」
「そ…うですか？」
そんな残念そうな顔されてもですね、なんとも言えないんですが……。よいしょっとおき上がりベッドから下りて立ち上がる、異常は無し。鼻血をしょっちゅう出すので俺の血は多いかもしれないな、なんて我ながら意味不明な事を考えていると校長の声でやかましい保健室の扉が開いた。
ヒロだった。俺と紅葉ちゃんを交互に見ると……紅葉ちゃんを見る時は鼻を伸ばした気がするが、とりあえず何度も俺たち二人を見返ししばらくそれを続けたかと思うと。少女マンガ顔負けの驚いた顔で
「保健室でなにをっ……！？壮児ロリコンだったのかーーっ！！」
気が狂ったらしい。
ヤバイモノを見ちまったぜとでも言いたげな顔していてなにかを勘違いしたままどっか行こうとするので首を掴んでとめておいた。
紅葉ちゃんはロリコン扱いされた事にショックを受けたのか一目見て分かるくらい落ち込んでいた、この状態になる前に『ろっ…ロリコっ…！？』と悲痛そうな声で呟いていていたのだが……よほどショックだったのだろうか？約一分経った今だが一時間経っても戻りそうにないくらいの落ち込みようだ。それと体操服を引っ張って胸

を覗き見るのはやめなさい。
そんなこんなでへこんでいる紅葉ちゃんへの励ましの言葉を考えているわけだが何を言っても今はマイナスに受け取りそうなのでとりあえずしばらくはそっとしておいて、今はこのバカをどうにかしないと。
「ヒロ…」
「わかってる壮児」

「流ちゃんには言うなだろ?」
全然分かってないよお前、そんな得意気な顔されても嬉しくも何ともねぇから。
「この子は俺の母親の再婚相手の連れ子っ!倒れた俺を介抱してくれてただけだ」
「なにぃ!?『この子は俺の結婚相手、押し倒して解放していただけだ』だとぉ!!お前なにを解放したんだぁ!ピーッなアレかぁっ!」
ダメだ、殺すしかない。
「……で、理解したか」
「はい、すいませんでした」
結局力づくで理解させた。保健室行き並みのダメージを受けたヒロだが何ともないみたいだ、不死身かこいつ。
「あ、あの。終会式終わったんですか?」
途中で乱闘している俺たちに気付き我に帰った紅葉ちゃん、今はもういつも通りだ。ちなみに彼女が俺を止めなかったらヒロとマジ喧嘩してたかもしれない。
「終わってないよ?抜け出してきた、今順位発表してんじゃね?」
悪びれもなく言うヒロだが、お前が終会式抜け出した事早乙女が知ったらどうなるか考えているのか?と、口にしたら多分ヒロは逃げ出すので面白くない。だから黙っておく。
「あっそ、んじゃ俺戻るから」

「えぇーっ！？サボってこうぜーっ！」
俺がそう言うとベッドに飛び込んで校長の声くらいデカイ声で言ってきた、俺はそれを無視してスタスタと保健室を出て歩いていく。ちなみに紅葉ちゃんも付いてきている。
分かってるよヒロ、告げ口しとくからさ。と心の中でヒロに言っといた、多分口で本人に言ったら『分かってねぇよ！』とか言ってくると思う。
誰に何を告げ口するって？早乙女にヒロが終会式サボった事をだよ。

「あ、紅葉ちゃんありがとうね」
「いえ、わたしが好きでやった事ですからっ」
そんな会話をして俺たちはそれぞれのクラスに戻っていく、あと早乙女にヒロの事を言ったら
「あいつっ！人が暑い思いしてんのにっ！」と言って保健室までダッシュして行った、相変わらずしょうもない事でケンカするなあいつら。
順位発表の結果、俺たち二年七組は四位と悪くない……むしろ良い成績だった。
一位のクラスの人は美味しさがバラバラなオムライスを楽しそうに食べている、一部悶えて死にそうな人達がいるのは皆気づかないフリだ。けっして三年五大美少女の一人に壊滅的に料理が下手な料理部がいるから……なんて事はない、のだ。ただ壊滅的と言うより破滅的と言った方がいいかもしれない、いや別に罰ゲームで食べさせられたなんてわけではない。
「んじゃー解散すっぞー、ＧＯＯＤ　ＢＹＥ！」
担任がそう言って締めるとぞろぞろと帰り出す生徒達、ボロボロのヒロがこっちを恨めしそうな目で見てるのを無視して流を探す。
「おっ、いた。流ーっ！」
流の背姿を見つけた俺がそう叫ぶと向こうも気づいたのか歩いて

きた、そうして歩き出した俺たちだがどこか気まずい空気が流れる。
「壮児……ごめんなさい、私の不注意で」
沈黙した空気を切り裂いたのは意外にも流だった、何の事だ？と数秒考えて。
「あぁ、二人三脚のアレ？でもあれは俺がしゃがんだのも悪…い」
待て？なんか…、今頭に引っ掛かったぞ。
「い、いや、それじゃなく、てさ…」
切れの悪い口調で流は気まずそうに目を逸らしてくる、唇に指を持っていったのを見て俺は完全に思いだした。

あの時、二人三脚が終わって二人で派手に転げた時になんで俺が鼻血を出したかを。
流が俺に覆い被さる様にこけてきた時、額がぶつかる前に。俺と流は……

キスしてしまったのだ。

「台風近づいてんだってさ」
「へぇ、暴風警報出て学校休みになんないかな？」
近くを歩く女子達の話がやけに大きく聞こえた気がした、俺たちが沈黙したたからだろうか。

だって考えてみろ。俺は、あの、流の、唇と。

「あー…」
顔に血液が集中するのを感じながら俺は唇に触れる。あの後すぐに柔らかかったなぁ、と考えて鼻血だしたんだっけか。
俺たちの間に気まずい沈黙が流れた。とりあえず家に着いたわけだが帰るまで互いに無言だった。

ＧＯＯＤ　ＢＹＥ俺のファーストキス。あれはカウントしていいのか？

十一話、家政婦さんと天然少女と体育祭・後編（後書き）

次回は気まずい空気のまま二人っきりで一日を……。パソコンで初めて書いてみました、一部ですが。

十二話、家政婦さんと気まずい空気でふたりっきり（前書き）

なんかもう恋愛にシフトしようかなってくらい。止まらないだ、この手が。みたいな事をいってる作者は置いときまして、本編どうぞ。

十二話、家政婦さんと気まずい空気でふたりっきり

なんとも困った事になった。
俺こと秋田壮児は果てしなくそう思った、なぜか、と聞かれたら俺はこう答えるだろう。二人っきりは気まずい。
まずはこのことから話そう、今日から約二日前に俺の高校では体育祭なるものが行われた。それがなんなんだ、とはまだ言わないでほしい。とりあえず簡略に述べると事故とはいえ我が家の家政婦さんとキ、キ…マウストゥーマウスしてしまったのだ。なんだそんな事かよ、とお思いのませた人たちもいるだろうが……俺にとってはファーストキスだったのだからその相手の人にドキドキしてうまくしゃべれなくなるのは仕方ないと思ってほしい、何？へたれだって？自分が一番分かっている。
まぁそういうわけで、気まずいと思っているのは向こうも同じらしく流と俺の関係は（何度も使っていてこんがらがるかも知れないが）なんとも気まずいものになっていた。
そこまででも充分同じ家に一緒に暮らしている間柄の俺たちには厳しいものがあるのに関わらず、アレはやってきた。
前話でさりげなく伏線がはってあるので想像ついている人がわんさかいるかも知れない、そんなのは置いといて。ｔｈｅ台風くんが暴風警報と共に我々が住む地域一帯にやってきたのだ。
「……はぁ…」
俺は部屋のベッドに寝転びながらため息をつく、親父は台風関係なく仕事に行っているので今この家には流と俺の二人っきりなのだ。
先ほど俺の友人の中では一番そーゆー恋愛事に詳しい洋介に『かくかくしかじかなんだけどどうしたらいいですか？』とメールを送った所『かくかくしかじかなんて言われても……説明お願い』とつまらなくまともな返事が来たのでついさっき事のあらましを送った

ので今は返信待ちである。
来た、相変わらず早いな。なになに『高二でファーストキス？ぷっ…』悪いな、君とは違うんですよ。続き『同棲しといていまさら何？キスくらいで浮かれてないで……略、もう襲っちゃえよ』なんで『略』してんの！？むしろ気になるつーの！
それより相談する相手を間違えていたらしい、これで俺は相談する相手がいなくなった。え？ヒロは、って？あいつに期待できるわけがない、早乙女とあいつを見ているとー目瞭然だ。と、まてよ？早乙女ならば少しは良い答えが期待できるかも……そう考えて俺は早乙女にメールを送る。
っ！電話かかってきた！

「もしも…」
『もしもし秋田！？それ本当！？』　直感でダメそうだな、と思った。
「うん、マジ。気まずいんだけどどうしたら良いでしょう？」
『え！マジなの！……おんもしろい事聞いちゃったなー！』
質問には答えてくれませんか？
『とりあえずいつも通りに接しなよ、んじゃあね』
と軽くアドバイスしてから一方的に電話を切られた、まぁ洋介よりはまともか……と思ったが。
それが出来ないから相談してんじゃねーか。

結局なんの解決にもならなかった。

「待て、たかがキスくらいだな、たかがキスくらい…！ただ唇と唇をくっつけるだけの行為ジャネーか！！秋田壮児、うろたえるなうろたえるだろ普通はーっ！」
変人よろしく俺は一人言をべらべらと喋る、部屋には俺しかいないが外に漏れてたらどうしようと後になって羞恥心。

瞬間、ドアをノックする音。
あばら骨を突き抜ける勢いでどきりと心臓を跳ね上がった、不整脈かなんかで死ぬかもしれない。ＡＥＤでも設置しようかな。（注：驚いただけでは多分不整脈にはなりません）
「壮児、昼ご飯」
「あ、すぐ行く」
ドアの向こうからの声に咄嗟に返事をしてしまったが階段を下りる音を聞いた頃になって緊張に呑まれた、二人っきりで食事ですか。はい、そうなんです。羞恥心と言う名の深い森で遭難しそうです。
うまく言ったつもりだったが、かなり虚しくなった。
とりあえず下に降りた。

「街の貴方に質問です♪ファーストキスはいつですかぁ♪」
ドッキーン！とまたまたあばら骨を突き抜けるくらい驚いた、多分人生でもトップクラスの驚き様である。リビングに入ってすぐに耳に入ったそれは、テレビでおねぇさんが道行く人に尋ねる系のよくあるパターンの番組で
台風のせいかその台詞を最後に砂嵐が画面を支配した、俺は近くにあったリモコンでテレビを消すが……今の俺の精神状態にはこのシーンとした空気はとても気まずく、更に先ほどのおねぇさんの台詞が更に気まずくさせる。
「「いただきます」」
うわぁお、ハモっちゃったぁ。

食卓を沈黙が支配する、いやいつもこんな感じだった気が……でも今は非常に気になるのです。
「壮児、」
がたんっ！と食卓に膝をぶつける、話しかけられただけでこの有り様。そこ、ヘタレと言うな。
「…なにしてるの」

「い、いや、気にしないで」
不思議そうに流はそう言ってくるのに対して俺は挙動不審に箸を進めながらそう言った。
「そうそう」と流が何かを思い出した様に箸を置きながら、ティッシュを手に取る。俺がそれを不思議そうに見ていると
「ほっぺについてる」
と言いながらそのティッシュで俺の頬を撫でた、コロッケを食べていたのだが動揺のし過ぎで頬っぺたに食いかけを突っ込んでいたのだろうか？流のティッシュにはコロッケの中身……クリームが付いていた、ちなみにクリームコロッケと普通のコロッケが今日の昼飯だ、あと千切りキャベツ。
「小学生じゃないんだから…」
と、また箸を進める流。一方、俺はコロッケを宙に浮かせながら硬直していた。
理由は言わなくても分かっているだろうが。
普通の男女は頬っぺについた食べ物を取ってあげるだろうか？
それこそ、付き合ってる男女とか、付き合ってる男女ならするだろう。

かーっと顔を赤くして少女マンガよろしく、ときめいた俺。え？少女マンガだったら男女逆だって？ほっとけ。
「食べないの？」
はっ、と流のその言葉で意識を取り戻してコロッケを口に運ぶ、いかんいかんトリップしていたよ。
「……」
「……」
また、沈黙が支配する。そこで俺はふと思った。
さっきから普通に話しかけて来てるけど――流はキスの事もう気にしてないの？
「……ぐふっ」

「壮児、がっつきすぎだよ」
むせた俺、今さらだがもしかしたら流はファーストキスじゃなかったりしてだから案外気にしてなくて……なんてこった、俺が照れてるだけかよ。
そう考えるとさっきの頬っぺたのやつだって、俺の事をなにも意識してない証拠か？
「ぐほっ！」
「うわっ！」
胸に激痛が走り胸辺りを掴みながら口の物を噴き出した俺に、驚きの表情を浮かべて珍しく取り乱す流。
チクショウ、そんな君もカワイーじゃないか。

「汚い」
若干ムスッとしながら机を拭く流、俺も一緒に拭いている。あぁ、情けない。
「もう、食べ物は粗末にしない」
たまに出てくる流のお母さんみたいな部分、俺は素直にはいとしか言えなかった。
机を拭いたフキンを水で洗う流の背中を見ながら残り少ないご飯を食べきる。
流も食べ終わったのかフキンの次に自分の食器を洗い始めた、俺が流し台まで食器を持っていくと無言で流が指を差すのでそこに置いておく。
あぁ、なんか――
「なんか本当の家族みたい」
え、と俺の口から情けなく声が漏れる。流が俺の気持ちを代弁するようにその言葉を口に出したからだ。
家族か……と俺は何処か嬉しくなった、それはもちろん夫婦という意味でとったからだ。だが次の言葉に俺はまたもう一度硬直する事になる

ふっ、と流は微笑んで
「姉弟みたい」
…きょうだい、ですか。
一人で浮かれて惨めになった、まぁ確かに姉弟なら頬っぺたにつ
いたの取ってもそこに色恋沙汰は含まれないよねーと半ば意味不明
な事を考えながら。
流が姉ですか、と弟みたく思われていた事にも愕然とした。
ダメージを受けすぎてちょっと思考回路がおかしくなっていたの
か俺は次にとんでもない事を口にする。

「でも、姉弟はキスしないよ」

ピタッ、と擬音が付きそうなくらい露骨に流は動きを止める。ジ
ャーッと水の流れる音が響き、俺は内心かなり焦りながら出来るだ
け平静を装った。
「あ、あれは、じ、事故?」
今までに聞いた事のないくらい緊張した声、俺は意識してくれて
たんだとちょっと嬉しくなる。そこで俺はまた調子にのって口を開
く。
「でもあれはキスだよね」
「事故」
ちょっと強気になった俺がそう言うと、焦った様に言い放つ流。
それでも俺は口を閉じず
「俺ファーストキスだったんだけど」
と俺が言うと、ビクッと痙攣したみたいに流は震える。シーンと
また沈黙して、どうしよう?とかなり焦っていると
「私だって!ファーストキスだったよ!」
流にしては珍しく大声を上げながら振り返った、顔は真っ赤っ赤

すぎて大丈夫かと心配するくらい。
とは言っても人の事は言えないくらい俺も顔を赤くしている、冷蔵庫に張られた片面が鏡になっている磁石シールで確認したから折り紙つきだ。
ふぅ、ふぅと鼻息を荒くする流。どうしようかと慌てる俺。
「え、じゃあ…互いにファーストキス…？」
情けない顔をしているだろうがとりあえず口にすると。流は少し落ち着いたのか、また向こうを向いて食器を洗い始める。
「…じゃあさ、」
とりあえず椅子に座ると流が口を開く。
「アレはお互い忘れてカウントしない事に…」
「そんなの…！」
がたっ！と椅子から勢い良く立ちながら俺はつい叫んでしまう。
内心流がファーストキスの相手で喜んでいたのに向こうは嫌だったみたいでかなりショックを受けたが、それでも無しにはしたくなかった。
「じゃあ、どうすれば…」
冷たい声で言う流に俺はガバッと後ろから抱きついた。
「…！！？」
「どうすればも何も……ファーストキスの相手が流で俺は満足なんだけど」
顔を赤くして慌てる流を無理やり押さえ付けて俺は呟く、それを聞いて流は身体から力を抜いて蛇口を捻り水を止める。
「私だって……ってない」
ぼそぼそと言う流の声はこっちまで聞こえてこない、なんだかんだで抱きついてしまったがどうしようか？セクハラだと言われたら逃れられないぞ、つか本当に俺何してんのっ！？
「もっかい言って」
とか思いつつも今さら後には退けないと抱く力をむしろ強めた。
「別に私も嫌じゃないって言ったの！」

ドスッ！と流の肘が決まり、ぐへっと呻きながら俺は離れた。やばい、鳩尾入った。
「なにさりげなく抱きついてるの！？皿落としそうだった！！」
「あ、あの〜…クールな流さんはいずこに…？」
「バカッ！アホッ！」
ドスッドスッゲシッ、と早乙女ばりに蹴りをかましてくる流に防御するしかない俺。
『お前ぜってぇ尻にひかれるわ』
ヒロのいつかの言葉を思い出しながら。怒ると怖いタイプだ絶対ーっ！と猛攻をガードしながら心の中で叫んだ。

結局次の日からはいつも通りに戻ったが、流を怒らせない様にしよう、と壮児は固く胸に誓った。
「壮児、早く行くよ？」
「え？あ、おぅ」
とりあえず俺達は学校へ向かう。

十二話、家政婦さんと気まずい空気でふたりっきり（後書き）

次回は家政婦と秋田とヒロが早乙女を尾行、ヒロ提案。

十三話、家政婦さん達尾行する（前書き）

週末更新はどこへやら。とりあえず、作者の悪い所。まとまりません。前後編です。

十三話、家政婦さん達尾行する

波乱のキス騒動（割と大袈裟）から二日後、すっかり元通りになった俺と流がいつもの様に学校へ登校すると。
「うん、じゃあまた放課後に」
「はいはいわかったー」
爽やかに笑顔を振り撒いてこれまた爽やかに言った勉強学年一位ことスカシ君（仮名）にいつもの様に軽い口調で答える彼女。
俺達の横を通って自分の教室に帰っていったスカシ君を俺と流は見て、その後に彼女……早乙女鈴音を見る。
「あんなに仲良かった？」
ぼそっと呟いた俺に。
「……割と喋ってるよ？」
と同じくぼそっと言い返してくる流。
「マジでっ！！」
ちなみにこれは俺ではない、しいて言うなら早乙女と彼とのやり取りを俺達の様に見ていて……なおかつ早乙女の話題に一番食いついてくる奴だ。
「デートォ！？」
「ら、らしいんだ…！」
あまりにヒロが悲痛そうに言ってきたので一応大袈裟に反応してみる、横にいる洋介はそんなことかとでも言いたげな顔をする。
「洋介っ！これは一大事だろっ！？」
ヒロが反応の悪い洋介に掴みかかる勢いで怒鳴り付けるがそれに対しての洋介の反応は――。
「高校生なんだからデートくらいするよ」

と、眼鏡を拭きながら冷たく言い放つだけだった。
「お前っ！あの鈴音がだぞ！」
「僕さ、真由理以外の女にそこまで詳しくないんだよね」
バンッと洋介の机を叩き事の重大さを伝えるヒロだが受取人不在、ちなみに洋介の所に俺が先日のキス騒動の話をしていた時にヒロが慌てて来た。
「出たよ真由理…！すぐにお前は真由理真由理って」
「悪い？」
「うるせぇ！彼女いなくて悪かったですねーっ！」
ギャーギャーうるさいヒロ、その原因たる早乙女は俺達とは離れた位置で流と話している。どうにかしてよこいつ。
「それにしてもあのスカシ君かぁ、結構やり手らしいからねぇ～」
ニヤリ、といやらしく笑う洋介。

「キス、ハグ……もしかしたらピーーまで……朝帰り？」
「うがぁぁぁ！そんなの認めないぞぉ！オレはそんなの認めないぞーっ！」
アッハッハッハ、とヒロをからかうのがそんなに面白いのかバカ笑いする洋介、ヒロは頭を抱えながら怒り狂っている。が
「まぁ僕はともかくとして、壮児だってキスまでやっちゃってるんだよねぇ」
ビキ…と石になるヒロ、俺はギギギと首を機械みたいに動かすヒロに苦笑いをしておいた。
「壮児…？オレとの『未キス同盟』は？」
死んだ顔で言うヒロ。
「そんなの組んでたの？まぁもはや同盟じゃなくてただの未キスだよねー」
満面の笑顔で毒舌をかます洋介。
「裏切りものーっ！いつの間にーっ！誰だっ！どこの女だー！」
再び怒るヒロ。

「…ながれ」
ニヘッ、とにやにやしながら言う俺。
「キャーー！」
と叫びながらぺちーんと頬をはたいてくるヒロ。
「待てヒロ、あれは事故だったんだよ！体育祭で転んだ時に！」
とか言いつつも依然にやにやする俺。

ヒロは崩れ落ちた。

「おーいヒロー、大丈夫ー？…ダメみたいだ壮児、返事がないただのしかばね…」
「はい、そこまで。それ以上は言うな」
すまんなヒロ、誰にも言ってないが実はハグまで行ってるんだよ俺。

「デートなんて一言も言ってなかったけど……」
昼休み、ジュースを買いに自販機まで流と行った時。なんとなく早乙女の話をする。
「ヒロがデートデートうるさかったんだけど」
「ただ放課後買い物に行くだけだよ？」
そんな会話をしながら自販機から缶ジュースを取っている、まぁそんなどうでもいいことは置いときまして、早乙女の件の詳しい内容をお教えしよう。
「鈴音って、部活の助っ人よくやっているでしょ？前に助っ人してもらったお礼をしたいって言われたみたい、前から欲しかった物買ってもらう……みたいな事言ってたけど」
だ、そうです。別に俺が説明するなんて言ってないだろ？
まぁ話を要約すると。早乙女がスカシ君の部活に助っ人へ、スカシ君お礼したいと（貢ぎたい）、早乙女了承、ヒロが聞く、ヒロ騒

ぐ。
ってわけだが……ふと思った。
「デートじゃね？」
「え？なんで」
俺が話を要約した結果だが、これはデートだろ。流に同意を求めたが不思議そうな顔をして聞き返してくる……やはり流はこうゆう系には疎いのか。
「流、こうゆうのはデートです」
「そうなの？」
まぁ受け取り方は人それぞれ違うからね、ちなみに今はベンチに座ってジュース飲みながら話しています。
「鈴音は全然そんな感じじゃなかったな、」
ぼそっと言う流の言葉を俺はしっかり耳にする、とりあえず早目に教室へ帰ろうとベンチからあがる。
「んー、てかさ、スカシ君は早乙女狙ってんのかも」
スカシ君？と流はまたまた不思議そうな顔をする、あぁ学年一位の彼の事ねと教えた。
「そういえば、相談された覚えがある」
「え、何を？」
さりげなくぼそっととんでもない事を流が言った気がする。
「スカ…シ君？に。鈴音の……例えば、好きな物とか教えてとか」
顔色一つ変えずに教室のドアを開きながら興味無さげに言う流にさすがだせ、と息を呑みつつ
「こりゃあ、ニュースだぜ」
と意味不明な言葉を言ってしまう俺だった、勝手に口角が上がってくるので必死に抑えていた。
面白い事になりそうだ。

その後
「おいこらスカシぃぃ！」

「まぁまぁまちなよ」
昼休みも終わりに近づき、俺が先ほど流から聞いた事をヒロに教えると今にもスカシ君の所に飛んで行きそうになったので洋介が腕を掴んで止めて……られずずるずると椅子に座りながら洋介は引っ張られていく。
俺はと言うとその様子を写メっていた。
「あっ、ヒロヒロ。スカシ君来てるよ」
「なにぃぃぃっ！！」
「アッハッハッハ！どんだけ必死！？嘘だよ嘘！」
ぶふぅ！と吹き出す洋介、ヒロはもはや怒り狂って真っ赤っ赤になっているが教室中の誰もがヒロの嫉妬？を面白がって見ている。
ちなみに早乙女はなんかの用事で担任に呼ばれていったので今教室にはいない。
「まぁまぁ、鈴音ちゃんがスカシ君を好きなわけじゃないんだからさぁ」
と、そんな感じにニヤニヤとしながら宥め始める洋介だが教室中の誰もが知っている。
「まっ、彼のが顔もいいし頭もいいから勝ち目ないかもだけどねー」
何って？そりゃあ一言多い事だよ？

「ってわけで、今回は尾行スペシャル～」
「何言ってるんだ？洋介」
毎度の事だが、ヒロがする事はいまいちよく分からん。
ってわけで、現在教室でスカシ君を待つ早乙女を我々は廊下から見張っていました。
「今回の話、場面の切り替え多いよねぇ」
「洋介！そんな事は言っちゃいかん！」
などというアクシデントもありながら、食い入る様に廊下と教室を見るヒロ提案の尾行作戦はのんびりと実行されていた。
「なんで私も？」

俺の横でカバンを持ちながら流が聞いてきたので返事に困った、だってヒロが流も呼べって言ったからさ～。
「んじゃ僕帰るんで」
となんだかんだで洋介も彼女を迎えに行き、三人だけになったので俺たちも帰るか、と流を連れて歩きだそうとするとヒロに腕を捕まれたので断念。
「あ、きた」
ぼそっと流が呟くとヒロが目をくわっと開いて二人の様子を盗み見し始める、流と俺はヒロのあまりのキモさに愕然とする。
「んじゃぁいくよー」
早乙女のそんな言葉が聞こえたかと思うと
「隠れろっ」
と、ヒロが慌てて俺たちもろとも隣のクラスになだれ込んだ、するとそのすぐ後に俺たちのいたドアから早乙女とスカシ君が出てそのまま歩いていく。
「よし、追うぞ」
そんなヒロのセリフを初めによく分からない尾行劇が始まったりする。俺と流は気だるそうに後をついていく。

「へぇ、結構仲は良さげなんだ」
「くっそぉ、あの野郎…！近い、近いんだよこのやろぉっ…！」
ぎりぎりぎり、と歯ぎしりしりしながら俺の言葉を無視して嫉妬を現わにするヒロ。
流がちゅーちゅーと紙パックのジュースを飲んでいるので俺的には早乙女よりこちらを見ていたいのだが。
「おっ店に入ったぞ？」
アクセサリーショップだろうか？きらきらと輝く銀がたくさん店の中にはある、その店のアクセサリーを見て、ふと思い出す。
「あれ？ヒロ、早乙女ってあーゆー趣味ないよな」
「ん、あぁ。あいつあれでも可愛い物が大好きだから」

んん？なんか、むしろ……まぁいいか。

「出たぞ…！」

アクセサリーを買ったのか小袋をスカートのポケットにしまいながら早乙女は出てきた、続いてスカシ君も出てくる。

割と近い位置にいたので二人の話す声が聞こえてきて耳をすます。

「ありがとねー、私今月小遣い無かったのよ、約束した手前あげないとうるさいし」

「あぁ、いいよ。そ、それでさ、あの件なんだけど…今日でいいかい？」

あの件？なんの話してんだ？

耳をすましていると二人は歩きだした、ヒロの方を見るが先ほどの話は聞いてなかった様だ、聞いとけよ。

「壮児、ついて行かないの？」

「え、いくいく」

とりあえず追いかけましょう。

「ヒロ、ここは流に潜入してもらおう」

所変わって、女性物を主に扱うブランドの店に。

何故に？まだ貢がせる気か早乙女。ってわけで、さっきのアクセサリーショップは小さかったから外からでも中を覗けたが今回はそんなわけにもいかないので

ノってきた俺はつい本格的に監視を協力し始めた、流の携帯と常に通話状態にしておき流には巨大サングラスをつけさせてニット帽を被らせて潜入させる。ニット帽はさりげなく俺からのプレゼントだ、似合ってて可愛いのだ。

『あ、、——似合—…い』

『そ……な、これ…な……ロく…』

ちなみに流は少し面倒臭そうだったが必死なヒロを見て哀れに思ったのか協力してくれた。

やはり盗聴機みたいに携帯を活用するのは無理があった様だ、全然聞き取れない。

「そ、壮児。どんな話をしているんだ？外から様子が見れないんだよ」
「まぁ待てよ」
ちなみに俺たちは店の外でぶらぶらとしている、ヒロは不審者レベルＭＡＸであると言っておこう。
『壮児？ちょ、ちょっと来て、すぐ』
「ん？どした流？」
突然、流が喋ったかと思うと電話を切られた。ちら、と店内を見るとニット帽を被りサングラスをちょっとずらしながら流が手招きしている、なんか可愛い。
「ちょっと待っとけ」
と、ヒロを置いて俺は店内に入る。流と合流しなんとなく流がつけていたサングラスをはめ、流がちょいちょいと指差す先を見る。
そして、サングラスをぽろっと落としそうになる。
「……」
目をこすり、サングラスをとってもう一度見た。
何を、かと言うと店員と知り合いなのか親しい雰囲気で話す服をいっぱい手に持った美人さんと早乙女をだ。
「な、ながれ、あれって」
「うん」
何をここまでうろたえているかと言うと、今試着室に入った美人さんが……なんてゆーか、スカシ君。
いつの間に化粧したのやら、髪型が少し変わって、立ち振舞いまでもが女性らしい。
「あれ、スカシ君だよな」
「うん、化粧してた」
とりあえず言わせてもらうとスカシ君が女装している、面影があるし。
つかかなり美人だ、多分街中歩いたらナンパされるくらい、どーでもよいが。

「かーわーいーぃ！」
突然聞こえた早乙女の大声にビクッ！と驚く俺と流、見るとスカシもとい美女くんに早乙女が抱きついている。
確かに今着ている服は可愛いっちゃ可愛い、ただ黒のフリフリした……なんてゆーか、ゴスロリだけど。
「これならヒロくんも…」

今なんて言いました？

「うんうん、ヒロもベタ惚れするって！」

「流、そろそろオチが見えてきたみたいだ」
「オチ…？なにが？」
ついつい良からぬ発言をしてしまう、なんて言うか……どうしよう。
「あれ？流？秋田ぁ！？」
「「あ」」
どうやら見つかったみたい、の巻。

「ってわけ」
「ふんふん、つまり、心は女、身体はイケメンの彼もとい彼女はあのヒロに好意を持っていて、近付きたかったがシャイなのでとりあえず街で会って偶然秘密を知られた早乙女にまず近付いた……と」
「なんか言い方が悪い」
げしっ、と早乙女に蹴られる、とりあえずそれは置いとくとしよう、そんで今俺たちは早乙女から事情を聞いた所だった。
恥ずかしさか、スカシ君は帰ってしまい、なんでここにいんのと尋問されて、とりあえず買い物と嘘をついた後の話だ。

「とりあえず続く」

「えっ!?　続かせるのっ!?」

十三話、家政婦さん達尾行する（後書き）

続きます、作者の実力不足を痛感しました、今回の話で

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9140f/

クールビューティー家政婦さん

2010年10月19日02時43分発行